
summer visit

河野夜兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

summer visit

【Nコード】

N3595V

【作者名】

河野夜兎

【あらすじ】

夏が来た。俺は彼女が言った「頑張る」と一緒に頑張るって決めた。僕は進んだ時間を振り返る。そして……。そんなひと夏のお話。

走り始めた二人

「自転車は、自分で転がる車だから自転車！」

俺の自転車の後ろ　　つまりは荷台に座り、ソーダ味の氷菓子を片手に突然叫ぶ彼女。

「自分で転がるって、いまいち…いや、全然意味わかんねえし…。
っ！か、自転車はきつと」

そついう意味合いで名付けられたんじゃないだろ…と、俺は盛大にため息をついて、自転車のペダルをせわしなく踏み回す。

歩道と車道の境目であるコンクリートブロックなんて親切なものは皆無、整備無縁な田舎の旧道。

彼女を乗せて走らせる自転車の右側の景色は、山　萎びた旅館
山　空き地　時々民家の繰り返し。

大して目を引くものなどない、退屈な景色だ。

左側は海岸線。

どんな角度から見ても真っ直ぐな水平線は青ではなく、青みを帯びた灰色だ。

境界線上の空は乱雑に擦れた白い雲と、水で絵の具を極限に薄めたような、かるうじて青に見える青。

海岸線には延々と白い砂浜、間隔を置き海へ向かい延びるように

積まれたテトラポット。海沿いに住む俺達にとっては、なんのことはない、見慣れた景色だ。

「アイス…なくなっちゃった…」

食べ終えた氷菓の棒を咥えながら発しているだろう彼女の淋しそうな声が背中から耳に届いた。

「はいはい、そりゃ残念な」

まるで幼子に向けるように、小さく笑みを含めて短い言葉を彼女に投げた。

きっとその言葉は、風圧にかき消されて彼女には届いてはいないだろうけど。

どこまでも起伏のないだからかな海沿いの道。ペダルを踏み込み向かう目的地は、俺にとっては一年とちょっとぶりで、彼女にとっては初めての場所になる。

中学から愛用している銀の自転車に彼女を乗せ、『特別な二人』として過ごし始めてかれこれ三ヶ月と半月が過ぎた俺達は高校二年生。

そして現在は、七月終わりの夏休み初頭、午前八時過ぎ。

前籠に彼女の小さなサンダル。時々舗装状態の悪いアスファルトで小さく跳ねる車体と共に、同じリズムでそれも小さく跳ねてる。

あと五分ほど。この繰り返し退屈な景色を抜けたら二人の目指す目的地。

五分後には、萎びたこの退屈な町から、少し賑やかな海沿いに横

並びの観光町へたどり着く。

サーフショップに海の家。売店や小綺麗な民宿に、大型の旅館。そして、目的地である小さなカフェハウスがそこにある。

「止まって！！！」

彼女が大きな声で突然叫ぶ。その声は、不安混じりというより、不安の塊みたいな声だった。

（全く往生際の悪い…）

俺は、彼女に聞こえないように小さく鼻を鳴らして、聞こえないふりをした。

「と〜め〜てっつ！！！」

背中をグーで叩かれたけど、無視してペダルを回す。

「とめてとめてとめて〜〜っつ！！！」

喚きながらかなり力をこめ俺の背中を乱打する。その声は今にも泣き出しそうで…。

「……」

盛大にため息をついてペダルを回す足を止めて、左ブレーキをゆっくりと握った。

自転車が止まると、一気に暑さが体にまとわりつき、体が熱を上げて汗がじわりと滲む。

彼女は荷台から降りた。しかし早朝とはいえ、日を浴びたアスフ

アルトはやっぱり裸足では熱いようで、二、三跳ねると慌てて荷台に飛び戻った。

「ここまで来て、逃げ帰るのか？ 蒼^{そうら}」

少しだけ口調を強めて、振り返らずに彼女に一言尋ねた。

「…逃げてないもん…逃げてなんか…」

彼女は萎れた声で呟き、俺の胸に回した両手に、ギュツと力をこめた。

「ちょっとだけ休憩したかっただけだもん…。ちゃんと大丈夫だもん…ちゃんと…」

明らかに上ずってる声を聞いて、やれやれという気持ちをこめて小さく笑った。

「大丈夫だよ」

懸命に堅く握られた白く小さな両手に、右手をかぶせるように乗せて一言、彼女の耳にちゃんと届く音量で声を放つ。

「ちゃんと傍にいるから」

重なる手は直射日光を受けてることもあり、否応なしに熱い。でも、自分のものではない熱。温度を感じられることが、今の彼女の緊張や不安を溶かす最善の策だって俺は知ってる。

「北村あ…、私…変な子…。だから…嫌われるかも…」
自信なさげな彼女のくぐもった声に、

「大丈夫だって…。変な奴が好物な変わり者だって、世の中には結構いるもんだ」

目的地でそわそわして俺達を待っているだろう二人を思い浮かべて、込み上げる吹き笑いを堪えた。

「そんな北村も、変わり者。私なんかのことで、こんなにも一生懸命…」

彼女の両腕に再度力がこもる。背中に感じる彼女からの温度と柔らかさ。

密着されるとかなり暑いし、軽いめまいと動悸におそわれるは、夏のせいだと思いたい…。

「別に…それほど一生懸命じゃない。ただ、自分がそうしたいと思っただけをほどほどにしてるだけだ」

照れ隠しの言葉だとはバレたくないけど、いつもより変に堅苦しい言い方で気付かれるかな…。

俺は、自分自身に小さな苦笑を落とした。

「ありがとう…。北村、私…、私っ！！ がんばるっっっ！！！」

自分に気合いを入れるかのように叫び、彼女は自転車を走らせるよう急かした。

そんな彼女に、小さく「がんばろう」って呟き、再度ペダルを踏み込み目的地までの一本道を走りだした。

相変わらずな僕ら

「もうそろそろかなあ？」

先刻から店の時計を何度も見上げては、ソワソワしながらダスタークロスでカウンターを拭く葉月に僕は、

「ちよつと落ち着こうか…」

と、厨房からアイスコーヒーを差し出した。

「そんな事言う洋二だって、さつきから何回も時計を見てることはバレバレだよ」

葉月はにんまりと笑ってアイスコーヒーを受け取り、カウンター席に腰を下ろした。

（相変わらず見てないようで、細かいところを見てるな…）

僕はやれやれと苦笑いしてアイスコーヒーを飲みながら、厨房から葉月の隣へと移動した。

「そわそわせずにはいられないよねっ！ 充月^{みつぎ}が彼女を連れて来るなんてっ！！」

葉月はストローでグラスに弧を描き、氷の鳴る涼やかな音色を奏でながら、絶え間なく頬や口元を緩ませている。

「充月君とは一年ちよつと振りくらいかな…。きつと更に男前になつてゐるんだろうね」

葉月の弟の充月君と会うのは今年の春、高校進学 of 祝いにと彼を店に呼んで、葉月と僕と三人で夕飯を食べた日以来だ。

あの頃の充月君は高校生と言うよりまだ、中学生の幼さが残り、まるで葉月の弟とは思えない程真面目でシャイで口数が少なかったな…。

「充月は姉の私が言うのもなんだけど、超イケメンになったよ」

葉月はふふーんと自慢気に笑った。

「中学の時は童顔チビだったのに、高校入って急に身長がグイッと伸びて、すごく男っぽくなっちゃってね」 我が弟ながら、目の保養になるな」

(…目の保養になるな…な彼氏じゃなくて、申し訳ない…)

思わず込み上げる僕の苦笑いを見て葉月は、

「洋二はイケメンでなく、その平凡なところがいいの」

夏の太陽の下で揺れる、向日葵のような笑顔が僕に向けられる。

…平凡…か。

「平凡が一番いいの。だって、彼女がいれど、まだ若いシングルなのにこんな素敵なカフェのオーナーで、プラスイケメンだったら私はきつといろんな心労に負けちゃうわよ…」

葉月は小さく口を尖らせながらアイスコーヒーを一口飲んでため息を落とした。

「色々心労が多いのは僕のほうだよ…」

僕は更に苦笑いして、また今年も近所である民宿『波音』にて住み込みの短期アルバイトに来ているはじめ君を思い浮かべた。

はじめ君は相変わらず葉月目当てでティータイムの時間には欠かさずここに休憩にやつてくるのだ。

毎日毎日葉月に果敢にアタックをかけては玉砕して、僕に毒を落として帰っていく。

全くもって迷惑だけど、根は悪い人ではないので嫌いではなかったりする。

それだけじゃない。

葉月の屈託のない笑顔と明るさに惹かれてここへ足を運ぶお客様は、結構いるわけで…。

（内心は…穏やかじゃないんだな…）

僕は無言でアイスコーヒーを喉に流しこんだ。

「洋二、何？ 難しい顔しちゃって」

葉月は僕を覗きこみ、小さく笑みを浮かべた。

「…なんでもないよ」

いまだに互いの顔の距離が近づく事にドキマギしてしまう弱腰な僕に、

「洋二…、顔赤い…。そういうの、こっちまでドキドキする…」

囁く葉月の唇は、薄いピンクのグロスで柔らかくも艶やかな光を放つ。

二十歳を過ぎると女性はどんどん大人の輝きを増すものなんだなと心から思う。

出会った頃の葉月は可愛いがとても似合う澁刺が全面に押し出された女の子だったけど、今の彼女は可愛いではなく綺麗という言葉のほぅが良く当て嵌まる。

それだけ、僕らの時間は進んだんだってことを実感せずにはいられなかった。

「ねえ、洋二い…」

葉月はまるで何かを強請るような声で僕の名前を呼んだ。

「…」

何を強請られたか、察した　というより、きっと僕も葉月と同じ気持ちだったと言ったほぅが正解だろう。

開店前。二人きりの静かな店内。BGMは相変わらず彼女が愛して止まないあのグループのポップなラブソング。

近づく僕ら。

目をゆっくりと閉じる葉月

カランカラン！

「……！！」

カウベルが激しく鳴り、僕らは目を見開き、ほぼ同時に入り口に顔を向けると、

「邪魔なら…、一旦出よう…か？」
「……」

入り口に立ち、眉間にシワを寄せて苦笑いする、

「みみみ充月君っ！？」

僕は立ち上がり、上昇する顔の熱さを笑って誤魔化した。

「…タイミングの悪い弟」

葉月は小さく舌打ちをして充月君をジロツと睨んだ。

「……」

充月君の後ろには、顔を赤らめ、茫然自失気味で僕らを見つめる女の子が「公然猥褻…」とつぶやき、ゆっくりと後退りし始めていた。

悪態と苦笑とKYな姉

（なんか気まずいな…）

とりあえず出されたアイスコーヒーを無言で飲みながらチラリと彼女に視線だけ向けると、仏頂面でアイスティーに刺さるストローをくわえたまま、じっと厨房内の洋二さんを睨み付けている…。

そんな視線にひたすら苦笑を浮かべる対面の洋二さんから（助けて欲しい）的な視線が姉に向けられるけど、華麗にスルーされてるし。

そんな姉はというと、カウンターで彼女の隣に座り「ワクワクしてますよっ！」と謂わんばかりに満面な笑みを浮かべて彼女を見つめている。

「…けど充月君。本当に久しぶりだよな？ 身長、何センチ伸びた？」

沈黙と彼女のガン見に耐えらなくなった洋二さんは、俺に話題を振ってきた。

「…今176センチだから15センチ位は伸びました」

そう告げてやんわり笑ったら、

「充月の身長なんてどーでもいいわよっ！ ねえねえっ！ 彼女名前なんていうのっ！」

姉は待ちきれないというオーラを発して隣の彼女に言葉を発した。

「昨日メールで教えただろ…」

「充月には聞いてない！」

俺の言葉を即シャットアウトする姉に、すげー理不尽な扱いだなと盛大にため息をつきたくなった。

そんな俺を見て、洋二さんは（お気の毒様…）と言いたげな苦笑を見せた。

「…蒼^{そう}。進藤蒼^{しんどうそう}という名前ですが…」

彼女　蒼は、ストローを口から放して、照れ隠しにストローの包み紙を指にくくると巻き付けながら小さくつぶやいた。

「そらちゃんかあ　かわいい名前つ。…で、充月とはどこまでいったの？」

「…姉ちゃん…、マジ頼むからさあ…」

俺は姉をジロツと睨み付けて牽制した。

「…昨日は北村と自転車で南町駅前のファミリーレストランまで行ってみました」

（つーか、どこまでいったの意味が違うだろ）と思ったが、姉や洋二さんに慣れるには会話をするのが一番手っ取り早い。だから、とりあえずは黙って聞くことにした。

「それから二軒隣の複合型ショッピングビル内2階にある『遊べる本屋』と称されるヘンテコ雑貨屋のキモカワ老人形と目一杯戯れた後、4階にあるペットショップの隅で北村と向き合いキ…」

彼女は急に会話を止めて、アイステイーを飲む為にストローをくわえた。

「…キ？…まさか　そのペットショップの隅でそらちゃんは充
月と…キス？」

姉の瞳がドキドキと期待で輝きを放つ。

「キングヨを見ました。私と北村は破廉恥な公然猥褻をするような
どヘンタイではありませんので」

そう告げて洋二さんを再度睨み付けた。

「…蒼、ちょっと言い過ぎ。つか、さっかからやたら洋二さんに
悪態つくのはやめろって」

これだけ露骨に洋二さんに対する態度が悪いと、さすがにマズい
だろうと思った俺は、蒼に少し強い口調を放った。

「……」

蒼は、口を結んで視線をグラスに落とした。

「…蒼ちゃん…、洋二のことあまり良く思っていない？　ごめんね
…初対面なのにあんな場面見せられたらやつぱり…」

姉は寂しさ混じりの複雑な笑みを浮かべてつぶやいた。

「……」

そんな姉のつぶやきに反応する気配を見せずに蒼は俯いたまま、
アイステイーのグラスを見つめ続けた。

「なんだか申し訳ない…」

洋二さんも複雑な笑みを浮かべて小さくつぶやいた。

「いや、違うんです。あの…実は、蒼は…」

俺は蒼の『心の事情』を二人に打ち明けた。

スタートライン。思い出す僕。

「男性…恐怖症…？」

葉月はそうつぶやき、僕の顔を見て戸惑いの表情を浮かべた。

「ああ…。しかも大人限定の…ね」

充月君も僕に視線を向けて苦笑いを浮かべた。

「なんでまた…大人限定って…」

葉月は蒼ちゃんの横顔を少し不安げに見つめてつぶやいた。

蒼ちゃんは視線を下に落として、ストローの包みを指に巻き付けて、手遊びをするけど、無言、無表情のまま。

「詳しい理由は…ごめん…。聞かないで貰えたら助かる…」
充月君はグラスに視線を落として弱々しい声を落とした。

「治したい…。だからここへ来たのです」
蒼ちゃんは、萎れた小さな声でそうつぶやいた。

「北村が言ってくれたのです。ここで色々な人に触れたら、怖いとか、気持ち悪いとか…きっと大丈夫になるって」

蒼ちゃんの言葉で何となく察しがついた。

充月君は、僕らを頼ってここへ訪ねて来てくれたということを。

「洋二さん…、あの…」

充月君は椅子から立ち上がり、僕に真っ直ぐな視線を向けて、

「夏休みの間、蒼と俺に店を手伝わせてもらえませんか？」

と言い、頭を深々と下げた。

「…手伝ってくれるのは、本当にありがたいよ。これから忙しくなるから、葉月と僕と二人じゃ、ちよつと不安だしね…」

僕は充月君をしつかりと見つめて、言葉を続けた。

「でもね、僕は一応遊びで店をやってるわけじゃないから」

本当はこんな事、言いたくない。でも、僕は充月君の心構えと意志が知れたかったから、僕の店に対する気持ちもちゃんと伝えようと思った。

「このお店は、お客様が来てくれることで成り立ってる。お客様がこの場所で僕の作る料理や葉月が作るこの場所の空気を好きだと思ってくれてるからこそ、足を運んでくれてるわけだ」

勿論、先代である父から受け継いでる大切な常連さんもいるし、心構えだってある。決して僕だけの力ではなくこの店は色んな『思い』で成り立ってる。

でも、そんな難しい話まではするつもりはない。

「俺も蒼も遊びで手伝うつもりはないです。やらせて貰えるなら、一生懸命やります」

充月君の瞳は、とても真っ直ぐで、僕は思わずうちの店に初めて

バイトに来た頃の葉月を思い出した。

流石といふかなんというか…。やっぱり姉弟、顔の作りはちよつと違うけど、纏うものは良く似てるなと感じて、思わず笑みが漏れそうになった。

「蒼ちゃんは？」

僕は、蒼ちゃんに視線を向けて様子を伺う。

「ちゃんと頑張ると決めたから、頑張ります」

気合いがこもるといふよりは、何だか僕に果敢に挑もうとするような瞳だった。

大きな二重瞼に少し色素の薄い茶色の瞳。

ふうわりとした葉月のセミロングとは対照的な真っ直ぐで黒いショートヘア。

淡いブルーのキャミソールの下の肌は驚くほど細く、まるで日の光を一切受け付けないような、透けるような白い肌だ。

見ただけであまり外気にふれていないことがよく理解できる。

（きっと、ここに来るにまで気持ちを持つてくるのは容易ではなかっただろうな…）

先刻から彼女が僕に放つ殺気にも似た空気で、何となくそう思った。

僕は、厨房からフロアに移動して充月君と蒼ちゃんの前に立った。充月君は蒼ちゃんに椅子から立つよう促して、二人揃い僕に体を、視線を向けた。

「明日から、朝八時に店に来てください」

僕は二人にそう告げた。

「出来れば今日から」「今日は無理だよ」

充月君の言葉を遮って言葉を放ったのは僕ではなく葉月だった。

「残念だけどね、蒼ちゃんの格好は『働く』に適してないから」

葉月は小さく笑みを浮かべて、蒼ちゃんの足元を指さした。

「サンダルはアウトなんだよね。あとね、露出の高いキャミソールもね」

蒼ちゃんの頭をそつと撫でて、

「カフェの仕事ってね、服装も大事よ。お客様相手にサンダルは失礼だし、何より厨房とフロアを行き来する時、危ないんだよね」

葉月は「ちよつと来て」と蒼ちゃんの手を引き厨房へと入った。

厨房の奥には小さなシンクと食洗機が設置されていて、床は水に濡れた状態だ。

「ここで作業をして、フロアに出ることも当たり前にあるんだよ。よし、フロアに行こう」

葉月は少し説明した後に、さいど蒼ちゃんとフロアへ戻る。

厨房とフロアの境目にはマットが置いてあり、そこを踏む形になるわけだが、

「あっ！！」

マットからフロアに足を置いた瞬間、蒼ちゃんはツルリと足を滑

らせて声を上げた。

勿論、そうなることを知っている葉月は蒼ちゃんの体を支えて「ねっ？ 危ないでしょ？」と笑いかけた。

「よくわかりました」

蒼ちゃんは俯いてほんのり顔を赤らめてつぶやいた。

「キャミソールがダメな理由はね…」

葉月は、コーヒーを運ぶトレイにお冷やおしぼりを乗せて蒼ちゃんに渡して、

「充月、ちょっとそこのテーブルに座って」

充月君に指示を出した。状況がイマイチ飲み込めないという顔色を伺わせつつも、充月君はテーブルに腰を下ろして様子を探るような視線を葉月に向けた。

「蒼ちゃん、このトレイを持って、充月をお客様だと思ってお水とおしぼりを出してみてください」

「はい…」

蒼ちゃんは戸惑いを見せながらも、葉月に言われた通りにお冷やおしぼりを充月君に出した。

「……！」

充月君はその蒼ちゃんの前屈みの姿勢にギョツとした後に顔を赤らめて、

「ダメだっ！ キャミソール絶対ダメっつー！！」

立ち上がり蒼ちゃんに激しく言い放った。

「????」

蒼ちゃんは状況が理解できずに訝しげに首を小さくひねった。

「蒼ちゃんはどうかしてかわからないみたいだね。さあ、充月君、説明してあげなさい」

葉月はにひひつと楽しげに充月君に笑いかけた。
そんな葉月を憎々しげに睨み付け、

「……………」

蒼ちゃんの耳元で小さく状況をつぶやいた。

「……！！」

蒼ちゃんは真っ赤になり、トレイで胸元を隠して充月君に向かって「こ、この変態……」とつぶやき、わなわなと震えた。

「ちよっ！ 誤解すんなよ！ 俺だってわざと見たいわけじゃなくて！ ちよっと目線の先にっ！ そのっ！」

慌てて弁解する充月君を見て、

「ね？ キャミソールは働くにふさわしくないでしょ？」

葉月はクスクスと笑って蒼ちゃんの肩を叩いた。

「肝に命じます…」

蒼ちゃんは充月にフンツと鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

そんなやり取りを見て、僕はまた思い出す。

（葉月も最初、同じ失敗をしてたよなあ…）

四年前、十七歳の葉月も、蒼ちゃんのように顔を赤らめてあたふたしていた。

この四年で葉月はすっかりこの店のフロアの主になり今、目の前の若い二人にレクチャーしてる。

何となく時間の流れをいつもよりはつきりと感じて、嬉しいやら少し切ないやら…。

僕の胸の中に言い表わしようのない不思議な気持ちが入み上げた。

ランチタイムの見学

明日から洋二さんの店を手伝えることが決まり、今日はもう帰るつもりでいた俺達に、

「ふたり共、せっかく朝早くからこっちに來たんだから一緒にお昼くらいは食べていきなよっ」

そう姉に引き止められて、ランチタイムの仕事を見学がてら、俺達は昼食をご馳走になることとなった。

人で店内が賑わうランチタイム。俺と蒼は入り口左側の二人用の席で店内の様子を眺める。

なるべく人目に触れないように、蒼は入り口に背を向けて座る。少し不安そうな顔を見せたが「北村が正面にいてくれるから大丈夫」と小さく笑ってひとつ頷いた。

入り口右側には雑誌や新聞が整理されてるこげ茶色の木製の本棚と、葉が細長く、少し背が高い観葉植物が置かれている。

横に広い出窓から見えるのは、人で賑わう海水浴場の景色。

出窓に並ぶ水色のガラスポットには薄緑が綺麗なポトスが植えられてて、なんとなく目を癒してくれるような気持ちになった。

カウベルが鳴ると、姉はとびきりの笑顔でお客さんを「いらつしやいませ」と出迎え、無駄のない動きでトレイに氷水とおしぼりを見せて運んでいく。

姉のアイボリーのカフェエプロンのポケットにはボールペンと伝票が挟まれた板。

お客さんから注文を受けると、颯爽とカウンターへ歩き、厨房の洋二さんへと明るく張りのある声でオーダーを通す。

蒼は横目でチラチラと厨房内の洋二さん姿を追っている。

「…洋二さん、悪い人じゃなかっただろ？」

俺の問いかけに、

「…わかんない」

蒼はやんわりと首を左右に振り、小さな苦笑を見せた。

「やつば…怖いかな？」

「うん…。少しだけ…。でも、大丈夫。今日は私、気持ち悪くないし震えてない」

両手を胸の辺りにかざして、握ったり開いたりして安堵の色を見せた。

「それってさ、結構大きな進歩だよな」

何だか嬉しくなつて、思わず声のトーンが上がってしまった俺を数秒見つめて、

「…北村は、本当に変わり者だね」

蒼は少し俯いて照れ笑いを浮かべた。

「今でも不思議だよ…。こんな私の隣に北村がいてくれることが…とても不思議…」

蒼の照れ笑いが、みるみるうちに申し訳なさげな苦笑へと変わる。

「別に不思議でも何でもないだろ？」

俺はテーブルに頬杖をつきやれやれと蒼に笑みを向けた。

慌ただしく鳴るカウベルに反して、どんどんご機嫌な声でお客を迎え入れる姉を目で追いかける。

ランチに来る客層は、結構若い人が多い。カウンターに向かう中年層はきつと常連だろう。姉を「葉月ちゃん」と呼び、姉もなんの抵抗もなく料理を運ぶ合間合間に世間話しをして笑ってる。

小さい頃から人見知りが激しくさほど活発ではなかった俺とは反対に、姉は近所で有名な人懐っこいじゃじゃ馬だった。その明るさと活発さで年寄りにしこたま可愛がられてたっけな…。

「北村あ…」

蒼はつぶやくように俺の名前を呼ぶ。

「ん？ どした？」

姉に向けた視線を蒼へと戻すと、

「北村のお姉さん、ずっと笑ってて疲れないのかな…？」

蒼の視線も、いつの間にか洋二さんから忙しく、楽しげに動き回る姉に移っていた。

「いや、あの人は万年箸が転んでも笑ってるタイプの人間だから、疲れないだろ…」

「…いいね、お姉さん。きつと毎日楽しいんだろうなあ…」

ため息混じりの蒼の寂しげな顔を見たら、自分に対しての不甲斐のなさが急に込み上げてきた。

（俺は蒼にたいした笑顔を与えてやれないもんな…）

トレイをカウンターに置き、お客さんと会話を楽しみながら受けた注文の品が出て来るのを待ってる姉の後ろ姿を見る。

出来上がった料理の皿をトレイに乗せた後に、厳しい表情を緩めて小さく笑みをこぼし「よろしく」と姉に声をかける洋二さんを見る。

姉を送り出すと洋二さんはまた少し厳しい表情に戻り、厨房内で忙しくフライパンを動かしてる。

「いいなあ…。大変そうだけど、何だか楽しそうだ」

蒼は厨房の洋二さんを見つめて微かに笑みを浮かべた。

「…いや、お前はフロアの手伝いだから」

再度やれやれという笑いが込み上げた俺に、

「明日…私は一体何回転ぶだろう…」

蒼は眉間にしわを寄せて口を尖らせた。

「…その前に、ちゃんと『いらっしやいませ』が言えればいいな…」

小さく吹き笑ってやったら、蒼は「うぬぬう…」と唸り、

「いらっしやいませくらい言えるっ！ 北村っ、私を甘くみたら大ケガをするぞ」

頬を赤らめて膨れっ面で俺を睨み付けた。

「まあ、互いにケガのないように気をつけてやろう」
込み上げる笑いが止まらない俺を見て、蒼はますます顔を赤くして悔しげに唸り声を上げた。

（きつと大丈夫だ。姉ちゃんもいるし、俺もちゃんといるから）

確信なんてものは無いし、大した力も俺には無いはずなのに、この時、元気な蒼を見て不覚にもそう決め込んだ。

小さな変化

忙しいランチタイムが終了を迎える13時ちょっと前。

厨房の真ん中、ステンレス製のシンク付きの調理盛り付け台には、大きめの白い皿が4枚。

調理台奥にはガスレンジ2つとフライヤーが1台。ガス台から少し離れた左端に業務用冷蔵庫があり、壁を一枚隔てた隣には小さな食糧倉庫がある。

調理台手前の、ちょうどカウンターの裏にあたる場所には小さめの調理台とシンクと右側に食洗機が横に並んでいる。

左側には、ホットコーヒー用のサイフォン式のドリップ機。その隣には朝一番に作るアイスコーヒーをストックしておく為の小さな冷蔵庫がひとつ。

父がまだ健在でいた頃は、厨房の真ん中の調理台を挟んで僕がカウンター側、父はガス台側にいて割り振りした個々の仕事をそれぞれでこなしていた。

あの頃は厨房が狭く感じて少し不便だと思ってたけど、父のいない今は一人ではちょっと広い気がする。

熱した2つのフライパンにバターを落とし、溶き卵を流し入れる。交互に手早く混ぜて、フライパンの柄を4〜5度ほど叩きながら卵をまとめていき、半熟のオムレツを作る。

それを皿に盛ったピラフの上にひとつずつ乗せて、父から受け継いだデミグラスソースをたっぷりかける。

その時、ふと視線を感じて、僕はフロアに目を遣った。
「……」

一連の僕の動作を無言で食い入るように見つめる瞳は、蒼ちゃんのものだった。

しかし、視線が僕と合うと、プイツとそっぱを向いてしまった。

（…料理に興味があるんだろうか？）

ふとそう思いつつ、僕は少し遅い昼食の支度を続けた。

「充月、蒼ちゃん、もうすぐお昼ご飯だからカウンターにおいでよ」

お客様が引いて静かになったフロアに葉月の声が響く。

カウンターにはすでに紙ナプキンとスプーンがスタンバイされている。

（素早いな。さすがは僕よりオムライスを愛する人だ…）

でも、そんな葉月が僕はとても好きだなと思う。

母を亡くしたと同時にフロアの主を失った寂しいこの店に、再度『光』を射し込んでくれたのは、おっちょこちよいだけど、いつも元気に笑って懸命にフロアで接客をしてくれた葉月だった。

そして、父が厨房に立てなくなったあの日、この店を継ぐうって決めた一番の理由は、葉月が「私は、アイビィのオムライスが世界で一番好きっ！」って笑ってくれたからだ。

お客様の笑顔は勿論大事だけど、僕は葉月の笑顔が一番大切なんだ。

それが、僕が日々笑顔で頑張れる理由なんだ。

カウンターに並んだ3人の前に、できたてのオムライスを並べる。

「お腹空いたよね？ さつ、あったかいうちに食べようっ」

葉月は、オムライスをじっと見つめる蒼ちゃんに弾む声を笑顔に向けた。

「いただきます…」

蒼ちゃんは手を合わせた後にスプーンを握り、オムライスをそりとひと口食べた。

葉月と充月君は、真ん中の蒼ちゃんに視線を向けて様子を伺っている。

「おいしい…」

半日強張っていた蒼ちゃんの顔が初めてふわりと緩み、口元に小さな笑みがこぼれた。

「でしょ？ でしょっ？ 洋二のオムライスはね、世界で1番おいしいんだからっ」

これでもか！ と謂わんばかりのご機嫌な葉月の笑顔。

「本当、すごい…うまい…」

充月君からも笑顔がこぼれた。

「いいなあ…。私も…」

蒼ちゃんは、一瞬自分のつぶやいた言葉にはっとした顔をして、黙り込みオムライスをぱくぱくと頬張った。

「蒼ちゃん、…もしかして厨房の仕事に興味があるのかな？」

小さな反応が返ってくるかもしれないと、思い切って聞いてみた。
蒼ちゃんは、僕とは決して視線を合わせはしないけど、ゆっくりと小さく頷いた。

「じゃあ、明日から蒼ちゃんフロアじゃなくて厨房に入って中の仕事を手伝って見たら？」

葉月はそう言っ僕を見つめた。

「ちょ…それは無理だろ…」

充月君は葉月を見つめて、小さな息を落とした。

「何で無理よ？ フロアで沢山の人を一気に相手して大変な思いをするよりも、まず洋二ひとりに慣れてみたほうが、私はいいような気がするけどなあ」

葉月はそう言っオムライスを美味しそうに頬張り笑った。

「…私…料理…やりたい」

蒼ちゃんは、スプーンを動かすのを止めて、

「厨房…入ってみたいです」

ギョツと力を込めた、挑む瞳が、僕に向けられた。

「厨房の仕事は結構大変だし、最初は調理ではなく簡単な仕込みや盛り付けの手伝いだよ？ それから、辛くなったら絶対無理はしないって約束できるかな？」

僕は蒼ちゃんの瞳の色を伺った。

「はい！ がんばります」

どうやら大丈夫みたいだ。今のところは。

「じゃあ、明日からよろしくお願いします」

僕は蒼ちゃんに向けて、小さく笑顔を見せた。

「……」

蒼ちゃんは僕から視線を外して「お……お願いしま……す」とつぶやいた。

やっぱりそんな簡単には慣れるわけないか……。

でも、朝よりは距離がほんの少しだけ縮まった気がして、僕は嬉しかった。

「よしっ、決まりだね　ってことは……充月とフロアか……」

葉月はニヤニヤした顔を充月君に向けて、

「いいじゃない　私が充月を立派なイケメンウェイターに育て上げてやるうではないかつ　」

むふふっと張り切る葉月にじと目を向けて、

「……別の意味で結構不安……」

充月君は盛大なため息をついて首をやりわり左右に振った。

「がんばろう、北村」

蒼ちゃんをつぶやきに、充月君は複雑そうな顔で「お……う……」とつぶやいた。

夏の日射しと近い海

「暑いなあ……」

蒼の口から零れた迷惑そうな言葉。けど、それと反して、その顔はとても楽しげだ。

昼食を終えてカフェを出て、ひとけ帰路の途中。

賑やかな場所から少し離れた人気のない昼下がりの海岸へ少し寄り道することにした。

海は静かできて、それでいて眩しくて広いなと改めて感じた。

海独特の、潮の匂いと湿り気を帯びた生ぬるい風に包まれて、俺達は白く乾いた柔らかな砂に足をとられそうになりつつも、一步、また一步と足を踏み出して、ゆっくりと波打ち際へと向かっていく。

眼前に果てしなく広がる海。太陽の光を水面に乱反射させながら、規則正しく浜辺に寄せては返す波。

身体中を包み込むように響く波音を感じながら少し目を細めて、

「こんな近くに海を感じたのは、本当に久しぶりだよ……」

蒼は感慨深げな笑みを浮かべた。

「海の近くに住んできると、逆に無理して意識して海に触れなくてもいいような気になるからな……」

それは気付いた頃からいつでも変わらずにある、ごく当たり前の

景色だからと俺は思ってる。

だけど今日は、そんな当たり前の景色が少しだけ特別な景色に感じる。

それはきつと、俺の隣に蒼がいて、どこか満足げに笑ってるからだろう。

「良かったな……」

心の言葉が声になり、驚くほど素直に俺の喉からこぼれ落ちた。

蒼は海風に吹かれて揺れる前髪を直しながら、俺を見上げて「うんっ」と頷き笑った。

「……」

二人無言で、どちらからともなく繋いだ手。蒼は、ゆっくりとその手を揺らす。

「……」

こういう時、うまく言葉が出なくなるもんなんだなってことを、俺は初めて知った。

色んな言葉が頭に浮かんだけど、きつとどれも声にだしたら陳腐なものばかりだろうな……。

小さく苦笑をした俺に、

「明日のことを考えて、ドキドキすることができると、楽しいね」

蒼は、瞳を潤ませて

「ありがとう。北村」

俺の胸に顔をそつと寄せた。

同時に、心臓が早鐘のようになり打ち、上昇する体温と同時に息をするのがほんの少し苦しくなった。

「ありがとう…」

震え混じりの涙声を発した蒼の頭をそつと撫でて、

「お礼なんて言わなくていいから…」

今はそう言うだけで精一杯なくらい、信じられないくらい鼓動は速まり、軽いめまいすら感じた。

「北村がもし同じクラスじゃなくって、あの時私に話しかけてくれなかったら…、私はずっと、ずっと苦しいままだった…」

蒼のつぶやきに黙って耳を傾ける。

「あんなことがあって…きっと私はこれからもずっとあの人の影に怯えながら、ひとりぼっちでいなきゃいけないって…」

「もう…いいから」

俺は、なるべく穏やかな声で蒼の頭をそつと撫でた。

「お前は何も悪くないから…」

胸の中にすっぽりと収まる蒼の細い体を両腕で包み込んだ。

どうか俺の言葉が蒼の心の深部に届いて欲しい。

蒼を苦しめて縛る辛い記憶から、心がほんの少しでも解き放たれればと強く願った。

「北村あ…、あつくるし…い…っ！」

蒼はぷはっ！と息継ぎをして俺を押し退ける。

その顔は、尋常じゃないくらい赤くて、こっちまでつられて赤面しそうになった…いや、多分俺もかなりだろうな…。

「ごめん…」

照れ臭くなつて苦笑混じりにつぶやいたら、

「クールダウンしなきゃっ！」

蒼はサンダルを脱ぎ捨てて俺の手を引っ張り波打ち際へと歩き出す。

「ちよっ！ 待て待て！ 俺、スニーカーだつて！」

「うるさ〜いっ！ そんなこと関係ないっ！」

蒼は俺から手を離して、「とりやつ！」と背中を押す…けど、細くて非力で150センチ程しか小さい身長 of 彼女が、175センチの俺を動かすなんて無理だろ…。

ほくそ笑み蒼を見たら、凄まじく悔しがり、唸り声まで上げる始末。

「北村のKは、KY（空気読めない）のKだなっ！」

そう捨て台詞を吐いて、波の中に突っ込んでいった。寄せる波が体に当たり、膝下の長さのジーンズが濡れてる。

「冷た〜いっ！」

前屈みになり、手を海水につけて、叫び笑う。

「気持ちいいぞ、北村っ！」

俺に入ってきて来いと言いたげな視線を向ける蒼に、

「そりや良かった良かった」
愛想笑いで頷きながら、入るのは無理だという空気を出してやった。

「なんだ、北村、金づちなのか」

蒼は挑発めいた言葉を投げて含み笑いを浮かべた。

「泳ぎは得意だ。ただし、靴や服を濡らすのは不得意だ」

鼻を鳴らしてそう返す俺に、蒼は「北村はつまらない男だな…」
とため息をついた。

むっ…、つまらん男だと…？

「ねえ、北村あっ！」

蒼は叫ぶ。

「私っ、明日から、自分の自転車で行くよ！」

蒼は、そう言って小さく笑顔を見せた。その小さな笑顔は、自信の色さえ伺えるものだった。

「…そうか」

つぶやいたら、なんか無性に海の中にいる蒼のもとへと走り出した気分になった。

「遅刻すんなよ！」

俺は叫びながら、波の中で笑う蒼へ向かって走った。

あ…、忘れてた。

「全くう…。みずくさい子だね…」

厨房の中に入り、ランチ用の皿を片付けながら葉月は小さく口を尖らせた。

僕はいつものように、ティータイム用のシフォンケーキの支度に取り掛かりながら、やや不機嫌さを漂わせる葉月のぼやきに耳を傾ける。

「…ほんの少し前までは、隠し事なんてしないで何でも話してくれたのになあ…」

寂しそうにため息をつきながら苦笑いを浮かべる葉月を見て、僕は、

「…僕は充月君の気持ち、何となくだけどわかるよ」

材料を混ぜ合わせた生地をリング状の型に流し込み、予熱を入れ終えたオーブンに入れて、一息つく。

そんな僕に葉月はアイスコーヒーを差し出して、

「それって、どんな気持ちなのよ…」

全く理解できないという顔を向けて、返答を待っている。

僕はアイスコーヒーを一口飲んで息をつき、

「充月君も男だってことだよ」

早朝に見た彼の真剣な眼差しを思い出したら、自然と口元が緩ん

だ。

「んんっ？ 何？ それじゃあ全然答えになってないじゃないっ！」

葉月は不服そうな顔と声を僕に向けるけど、やんわりと笑みを返して終わりにした。

いくら大事な葉月にでも易々と言うつもりはない男心があるってことだ。

大事な気持ちだからこそ、軽はずみに口にしたくない言葉ってあと僕は思ってる。

「…とにかく、僕はしばらく2人を見守ってやろうと思う。できることをやりながら、ね」

曖昧な言葉で申し訳ないと思いつつ、僕は葉月にそれ以上は追及しないで欲しいな…と願いをこめて小さく笑った。

「…洋二がそう言うなら、私も2人を見守ってみる」

多少の不服感が残しつつも、葉月は納得しようと僕に歩み寄りように小さく笑顔を見せてくれた。

事情が全くわからない蒼ちゃんの男性恐怖症。しかも大人限定ってちょっと特異な感じに戸惑いを隠せない葉月の不安な気持ちは充分理解できる。

実際僕も不安だから。

蒼ちゃんの身に一体何が起きたのか…。

男性恐怖症という言葉に対して、僕は正直あまり想像したくない事を浮かべてしまう。

異性を怖がるって事は、相当ショックな出来事を受けなければ、あまり縁のない感情だと思うから…。

「ねえ、洋二…」

葉月は珍しく真剣な顔で僕をじっと見つめて、

「…はじめ君には、事情を話しておいたほうがいいかもしれないね…」

…しまった。

角度を変えると結構危険な存在である、ウチの常連のはじめ君の存在を忘れてた…。

僕は思わず苦笑いしながら、

「そうだな…。はじめ君にはきちんと話しておかなきゃ…」
後に面倒なことになりかねない。

遠慮無しなああの物言いと、フレンドリーさと、好奇心の旺盛さは、蒼ちゃんや充月君の気持ちには逆作用してしまう恐れがある。

オープンから漂うシフォンケーキの甘い薫りと共に、タイマーがケーキの焼き上がりを告げると、カフェの出入口のカウベルが来客を告げた。

ティータイムの15分程前の来客は、一々顔を確認しなくてもわかる人…。

「はじめ君が来た…」

葉月は、一瞬不安な顔を僕に見せたけど、

「いらっしゃーい」

と、カウンター越しにはじめ君に笑顔を見せて、いつものように挨拶で迎えた。

「葉月ちゃん、こんにちわ　　今日も変わらずかわいいね」

はじめ君は、にこやかに笑って葉月を見つめた後、
「やあ、オーナー。相変わらず存在が邪魔だね」

お決まりのおちゃらけ混じりでいて、やや本音混じりの牽制に僕はいつものように苦笑い。

「今日は、ドリンク何にする？」

お冷やと紙おしぼりを出して、葉月ははじめ君に尋ねた。

「アイスティーがいいな…ん？　葉月ちゃん、なんか今日、ちょっと空気が違うな。何かあった？」

…はじめ君は、鋭すぎると思う。

さすが漫画家志望だ。観察眼が冴えすぎてると、僕は盛大にため息をつきたくなった。

「もしかしてっ、オーナーと喧嘩したとかっ」

ウキウキした声を発したはじめ君に、

「喧嘩なんかしないわよお…今日もラブラブです」

葉月はやれやれと嘆息して、アイスティーの準備に取り掛かった。

「なーんだ…つまんね」

はじめ君は小さく舌打ちをして、ニツコリとした笑みを僕に向けて、

「…で？ 何があつたの？」

そう言つて、グラスの水を一口飲んだ。

帰り道

「アイス食べたい…。ソーダ味のアイスが、無性に食べたい…」

自転車の後ろ　つまりは荷台に乗ってる蒼は、きつと膨れっ面か、バテ顔かどっちかで俺の背中をグーで殴ってきやがる…。

「そりゃ無理だな。こんなずぶ濡れでコンビニはおるか、売店にすら入る勇氣はねーよ…」

嘆息気味にそうつぶやいたけど、きつと風圧に掻き消されて俺の声は蒼には届いてないだろうな…。

「ジュース、ぬるくなった！　北村っ！　あげる！」

先刻自販機で買ったペットボトルを握りしめた白くて細い蒼の腕が、後ろからにゅっ、と右ハンドル付近へ伸ばされた。

（いやいや、この状態で、一体どうやって飲めってんだ？）

後ろの荷物（蒼）を気遣いながら丁字のハンドルを握りしめて、ペダルを踏み込むという作業中に、キャップの開いてないペットボトルを渡されても…なあ…。

そんなとんちんかんな蒼の行動に、なんだか妙な笑いが込み上げつつも、やんわりと「いや、飲みかけのぬるいジュースはいらない」って一言告げた。

そんな俺に「せつかくの人の好意を無にするとはい！」と叫び、ペットボトルで軽く俺の背中を叩いて「えいっ！」って声をあげた。

「ちよつ、そんなもんで叩くなよっ！」

そう言いながらも、込み上げた笑いを堪えることができなくて、俺は声を出して笑う始末。

蒼もそんな俺につられてクスクスと笑いだした。

まだまだ日が沈む気配のない午後4時過ぎ。

生ぬるい海風と熱い日射しを体中に浴びながら、視線を少し上向きにすると、淡く眩しい青空にそびえ立つように前方に見える大きな入道雲。

全く夏ってやつは不思議だ。

こんなにも暑くて、こんなにも眩しくて…。

そして、こんなにも心が躍る。

夏っていうだけで、何もかもがキラキラ輝いて見える。

きっとそれは、俺が今、1人きりではなく、誰かと一緒に時間を分かち合ってるからってのもあるだろうな…。

背中で笑ってる蒼の顔は肉眼では見えないけど、別の部分の目つまり、心の目ではくつきりと鮮やかに見える。

そんな蒼を浮かべたら、否応なしに躍るように鼓動が速まった。

「北村のお姉さんはまるでひまわりみたいだなあ…」

蒼はふふつと楽しそうに笑ってつぶやいた。

「ひまわり…か…」

確かに。

あの筋金入りのポジティブさと言い、些細なことでも楽しく笑って話す姉を思い浮かべたら、太陽に向かって精一杯真っ直ぐに伸びる

大輪のひまわりみたいだなって思った。

（蒼のこと…うまく話せなくてごめん…）

心の中で何となく姉に詫びたくなった。

何だかんだで心配性な人だから、気になってるだろうな…。

でも、言えない…。

今はまだ…。

「お姉さんの彼氏…さんは…、つくしみたい人だった…」

蒼が発した言葉にほんの一瞬だけ思考が止まった。

「え？　ちよつ、待て。つくしって…」

洋二さんを思い浮かべたら、ちよつと吹き出しそうになった。

（すみません洋二さん…）

その容姿は俺より少し高い身長でやや細い体。髪は短めで控え目な焦げ茶色。

海辺でカフェを経営してるのに、あまり日に当たってなさげな白めの肌。

トータルして年相応ではなく若干上に見えるってか、年の割りには落ち着き過ぎてる感じがする。

姉と同じ22歳には見えないくらい、しっかりとした大人の男だなと俺は思う。

「…つく…し…か…」

つぶやいたら、妙に納得してる自分に気付いた。

「つくし…、嫌いじゃない…」

そうつぶやいた蒼に、

「そりゃ良かった」

俺は笑いを噛み殺してつぶやき返した。

はじめ君…

「へー…、男性恐怖症、しかも大人限定って、変わってんなあ…」

はじめ君はアイステイーのストローをくるくると回しながら僕の顔をじっと見つめて、

「オーナーはどう思う？」

「どう…って？」

はじめ君の尋ねる意味が何となく理解できた僕は、自分の見解を述べることはぐらかすようにはじめ君に尋ね返した。

「その葉月ちゃんの弟の彼女…蒼ちゃんだっけ？ その子が男嫌いになっちゃった理由だよ」

まるではぐらかすなと言いたげな目を僕に向けて、答えを求めるはじめ君に、

「原因を勘ぐるのは苦手です」

やんわりと笑って黙秘の態度を取った。

「葉月ちゃんは？ どう思った？」

視線を僕から葉月に切り替えて、はじめ君は再度回答を待つ。

「…よくわかんないよ…」

葉月は紙ナプキンを補充しながら、僕と同じようにもやんわりと笑って黙秘の態度を取った。

「よほどこっぴどく男にフラれたとか…。もしかしてガッコの先生にヤラれちゃったとか、…ああ…父親って可能性も」

「やめてよっ！ はじめ君！」

それ以上言うなと謂わんばかりに声を荒げたのは、葉月だった。

「いや…、男嫌いになるってさ、どうしても色恋沙汰とか性的なものと結びつけて思い浮かべちゃうのは仕方ないか？」

はじめ君はやれやれと笑ってシフォンケーキをフォークでつついた。

「そんなこと堂々と思い浮かべるのは、はじめ君だけだよ！ それに！ そっついうこと、軽はずみに口に出しちゃうのは良くないよっ！」

葉月は、僕に視線を向けて「ねえ？」って同意を求めてきたけど…。

僕は苦笑しか返すことができなかった。

「葉月ちゃんって、なんか時々やたら生娘みたいな反応するよね？もしかしておたくら、まだヤツてないとか…？」

ふへへっとしまりのない顔で笑うはじめ君を睨んで、葉月はわなわなと奮えながら、

「ご心配なくっ！ 洋二と私とは身も心も深く結ばれちゃってますからっ！」 フンッ！ っとひとつ鼻を鳴らして、

「とにかくっ！ 明日から蒼ちゃんと弟の充月が店の手伝いに入るから！ 絶対に余計なこととか聞いたりしたりしないでよねっ！」

頬を紅潮させて息を荒げた葉月を見て、はじめ君は、

「俺、葉月ちゃんの怒った顔、超好きだなあ」

細い肩と少し長くて黒い前髪を揺らしてケラケラと笑いだした。

「はじめ君…、あまり葉月をからかわないでよ…」

僕は苦笑いではじめ君にそう一言告げた。

「別にからかったつもりはないよ。葉月ちゃんの怒った顔が好きってのは本心だし。なんつーか、創作意欲が妙に沸くっつーかね」

口元を緩めて葉月を見るはじめ君に、

「…創作意欲だか何だかそんなの知らないけど！ あの子達を傷つけるようなことしたら、お店出入り禁止にするからねっ！」

葉月は、はじめ君に人差し指を突き付けて言い放った。

「…過保護だねえ」

はじめ君は僕に視線を投げて愉快そうにつぶやいた。

「過保護で結構よ。充月は大事な家族だし、充月が初めて紹介してくれた彼女の蒼ちゃんだって、大事なんだからっ」

「過剰防衛して、逆に傷つけちゃうってこともあるって、覚えいたほぅがいいよ」

はじめ君はやっぱりと笑みを浮かべて、アイステイーを飲むと小さく息を落とした。

「心の傷ってやつは、時々人の表面上の優しさで更に酷くなる時があるからね。上っ面だけで相手を優しくいい子いい子してたら、逆

に相手にもつと深手を追わせることだってあるからさ…」

はじめ君は、少し寂しそうな、ははっと笑って僕らにそう告げた。

「はじめ…君…?」

葉月はそんなはじめ君の愁いを帯びた顔を見つめて、不安そうな表情を浮かべてつぶやいた。

「なーんて台詞を主役に言わせられるような、爽やかな青春モノが描きたいな」

はじめ君はくくつと笑って、

「よしっそろそろ休憩終わるから、波音に戻るわ。あ、オーナー、俺、紅茶のシフォンケーキが食べたい。そのうちメニューに入れてくれないかな?」

席を立って僕に視線を向けた。

「紅茶シフォンですね。はい、検討します」

僕は、はじめ君に小さく頭を下げて笑みを返した。

「葉月ちゃん、また明日ね」

膨れっ面でティーセットのチケットを切り、レジを打ち込む葉月に手をひらひらと振り、はじめ君は仕事に戻っていった。

「はじめ君って本当にわけわかんない人っ」

カウンターのグラスとケーキのプレートを僕に差しだして、口を

尖らせた葉月に、

「まあ……ね」

と相づちを打ちはしたものの、

（確かに一見わけわかんないけど、言ってることは的を獲てるかもしれないな……）

はじめ君の寂しげな笑みを思い出したら、何となくだけど、そう思った。

まじないのように…

平坦な海沿いの旧道を家路に向かい自転車を走らせる。

鬱蒼とした草が茂る空き地を越えた小さな交差点を右に曲がり、数分走ると道の両脇に住宅街が広がる。その中に蒼の住む家がある。

蒼の家は元々この界隈の大地主で、この住宅街の土地も全て彼女の祖父のものだったらしい。

周りの民家とはちよつと違って、広い敷地を囲う黒い木造の塀がやたらデカくて、ちよつと格式の高そうな威圧感を感じる、立派な門構えの日本家屋が蒼の暮らす家だ。

塀から門までの距離に自転車がさしかかると、蒼は「とめて…」と、弱々しい声で俺のシャツの小脇を引っ張る。

左ブレーキをゆっくりと握り、自転車を停めると、

蒼はのそりと重い足取りで荷台から降りて、俯いて立ち止まってしまった。

「…大丈夫だよ…」

蒼は俯いたまま作つたように明るい声を発したけど、

「…んなわけねーだろ…」 明らかに震えた声や、震えを懸命に止めるために固く握りしめられた両手を見たら、どんな鈍感なバカでもわかるだろう…。

蒼の頭をそつと胸に引き寄せると、

「北村あ…、シャツが磯くさい」

胸の中で微かに笑んだ。そんな蒼の声に、胸が軋んで、言葉が返せなくなってしまう、情けないな…。

「北村あ…」

蒼は俯いたまま再度俺の名前をつぶやいた。

「…がんばれって言って…」

震える両手で、俺のシャツを掴み、

「…お願い…。がんばれって言って…」

弱々しくも強い言葉。

それは、まるで自分を動かすまじないでも求めているような、そんな切願を込めた言葉に感じた。

「がんばれ」

本当は、蒼にこんな言葉はかけたくない。

蒼はこんなに頑張って、自分の苦しい気持ちと戦ってるじゃないか…。

「がんばれ！」

あんな事件があつて、家族から家の恥曝しだと疎外され、孤立する日々を続けて一年近く…。

悪いのは蒼じゃなく、全てアイツなのに！

蒼に付き纏い、苦しめた拳げ句、当て付けのように逝ってしまったあの男の顔を思い出したら、身体中の血液が沸騰する感覚に襲われる。

「がんばれ！」

俺には蒼の全てを守る力なんてない、中途半端で弱いガキだ。こうしてずっと辛い気持ちを背負う蒼に、こんな陳腐な言葉しか与えてやれない。悔しいよな…本当に。

胸の中に包み込んだ、細く小さな身体は、懸命に震えを止め、呼吸を整えようと、深く息を吸い込み、ゆっくりと吐くを数回繰り返している。

「がんばれ」

蒼の頭に頬を寄せて、込み上げる胸の苦しさを堪えながら、俺はまじないのように、何度も何度も繰り返す。

そうするうちに、蒼の呼吸は落ち着きを取り戻し、手や身体の震えも徐々に治まっていく。

「がんばるよ…」

小さなつぶやきに、力が宿った気がした。

「がんばるよ。もう逃げないって決めたんだから」

顔を上げた蒼の瞳は少し赤くなって潤んでた。

「明日から、新しいことが始まる。北村と一緒に始める、始めたい。だから、がんばりたい」

小さな光が宿ったかのように、蒼の色素の少し薄い茶色い瞳は真
っ直ぐに俺の目を捕えた。

「ああ、一緒に頑張ろう」

楽しいことばかりではないだろうけど、少しでも蒼が笑顔で前に
進めるようにと願いを込めて、俺は小さく笑みを贈った。

「よし、もう大丈夫っ」

蒼はまだ少しぎこちなさは残れど、笑みを浮かべて俺の胸から離
れた。

「大丈夫っ！ 歩けるっ！」

2、3、軽く足踏みをした後、ゆっくりと歩き出した。俺はゆっ
くりと自転車をひきながら蒼の少し後ろを歩く。

「……」

蒼が急につぶやくように歌ったのは、アイビーで流れてた姉の好
きなバンドのポップなラブソングだった。

幼な子のような蒼のソプラノにつられるように、俺も自然と歌を
口ずさむ。

門まであと数メートル。

二人でいられるその短い距離を惜しむように、しかし挑むように確
実に、蒼は歌いながらも踏みしめるように門を目指して歩いた。

そんな蒼の小さな背中を見つめて、俺はやっぱり

『頑張れ』って言葉を心の中で唱えてた。

CLOSE〜1日の終わり〜

まだ日暮れには程遠い、陽光が明るくまぶしい夏の午後5時。

僕は厨房を片付け終えて、暖かいレモンティーを入れ、看板を「OPEN」から「CLOSE」へと替える為に表に出た葉月を待つ。

カウベルが鳴り、

「んん〜っ 今日忙しい1日だったあ〜っ」

と、葉月は身体を伸ばしてホッと息を抜いた。

「今日も1日お疲れ様でした」

僕はカウンターにレモンティーを出して葉月に小さく頭を下げた。

「オーナー、お疲れ様でした」

葉月も小さく頭を下げて、満足そうな笑みを浮かべた。

「今日は色々あってちょっと疲れたろ？」

僕は葉月の隣に座り小さく息をついた。

「うん、ちょっとだね」

葉月はレモンティーを一口、ゆっくりと飲んで口元を緩ませて小さな息をついた。

「明日から、二人が仕事を覚えるまではしばらく忙しくなるな…」
蒼ちゃんの仏頂面を思い出すと、否応なしに苦笑いが込み上げる。

「厨房に人が入るなんて、何だか不思議だね」

葉月は感慨深い顔で厨房を見つめてつぶやいた。

「なんか、緊張するな…。正直僕は人に何かを教えるのは得意じゃないからね」

厨房に目を遣ると、何だかため息が出た。

「大丈夫よ。絶対洋二なら蒼ちゃんとうまくやれるよ」

葉月の視線は厨房から僕に真っ直ぐに向けられていた。

「でも、あまり仲良くなったら…やだなあ…」

葉月はぼつりと言い終えた後、はつとして「ごめん…今の無し…」と苦笑いを浮かべると、照れ隠しをするように再度ソーサーを口元へと運んだ。

「正直ちよつとジェラシー…。だって、厨房は洋二だけの場所で、調理は私が触れることのできない領域で…。あの場所に誰かが入って一緒に仕事をするなんて、今まで考えてもみなかったから…」

葉月は少しさびしそうな顔で小さく笑みを浮かべた。

「おかしいよね？ 私が蒼ちゃんに厨房に入ればって言ったのにね…」

そうつぶやき、葉月は頭を僕の肩にそつと寄せた。

「ここには僕と葉月の場所がきちんとあって、その互いの場所を尊重しあうことができてから、お客様も安心して足を運んでくれるって僕は思ってるよ」

葉月にしかできないこと。そして、僕にしかできないこと。
そのどちらかのバランスが偏ってしまえば、きっと店は店として
成り立ちはしないと僕は思ってる。

「僕は葉月がフロアにいてくれるお陰で、厨房で精一杯頑張ることが
できてるよ。本当にありがとう」

僕は葉月に笑みを向けた。

「それからさ、僕は、葉月が店の厨房ではなく、うちの台所に立っ
て、夕飯を作ってくれて、それを一緒に食べることができるようが、
とても幸せで尊いと思ってるよ」

改めてこういうことを言うつて、かなり照れ臭いけど、ちゃんと
伝えたいと思った。

「今日の夕飯は何にしようか？」

葉月は嬉しそうに僕に笑みを向ける。

「そうだなあ……。今日も暑かったから、ちょっとさっぱりしたもの
がいいかな？」

僕の注文に、数秒考えた葉月は、

「よしっ 今日サラダ冷しゃぶにしようっ」

椅子から立ち上がり、

「さっ、洋二、買い物買い物っ 今日私は私が車の運転するから、
お店の戸締まりよろしくっ」

椅子に腰掛けた僕の背中にギュツとしがみつき、短く頬を寄せると、
軽やかな足取りで店の裏口から駐車場へと出ていった。

「…本当、疲れ知らずだよな」

葉月の柔らかな温もりが残る左頬をさすりながら、こみあげる気
恥ずかしさと温かさで思わず口元が緩む。

「よし、戸締まり、戸締まり」

僕も立ち上がり、店の入り口の鍵を締めて、裏口へと歩いた。

鍵を締めると、駐車場にはエンジンのかかった黒い軽自動車。
運転席には葉月の笑顔。

僕らの日常の日課となってる閉店後の夕飯の買い物。

葉月と一緒に暮らし始めて早いものでもう4ヶ月になる。

「もうそろそろ…」

ちゃんと、葉月に大事な言葉を伝えたい…。

「よしつ、夏が終わった…」

密かに決意し、両拳を握る。

「がんばろう」

小さく自分に気合いを入れて、僕は葉月が待つ車へと小走りした。

早朝、スタートライン

いつもなら、携帯のアラームのしつこいスヌーズ機能を幾度となく手探りで止める朝。

でも今日はそんなしつこいアラームより2時間も早く目が覚めた。

携帯を開くと午前5時を少し過ぎた時間。起き抜けの気だるさよりも、心がそわそわとするほうが勝り、俺はベッドから起きて、真横のカーテンが開けっ放しの窓を見つめた。

夏の日の出は中々早いもんだな…。外はすでになんかの明るさだ。今日もいい天気だ。きつとこの部屋を一步出たら、否応なしに暑さが体にまとわりついてくるだろうな…。

ベッドから出て、とりあえず冷房で渴いた喉を潤す為に1階の台所へ向かう。部屋のドアを開けたら、案の定、むわっとする暑さに包まれて思わず「暑っ…」と言葉が零れた。

階段を降りて1階へ降りる。当たり前だけど誰も起きてない静かなリビングの奥には目指す台所。

何となく物音をたてることをためらい、なるべく足音を消すように普段よりそっと歩く自分に小さな苦笑が沸いてくる。

冷蔵庫にたどり着き、そっとそれを開けて、飲みかけのペットボトルのスポーツドリンクを取り出し、リビングへ歩きながら喉に流し込む。

体内が冷やされた感じで暑さがほんのり和らぎ、ソファアに座っ

てテレビのリモコンを押し電源を入れる。

早朝だからどのチャンネルもろくな番組がやってない…。

何となくため息が出て、リモコンをテレビに向けて電源をきった。

「とりあえずシャワー浴びるか…」

スポドリを全て飲み干して息をつき、俺は着替えを取りに自室へと戻った。

ドアを開けると別天地。冷房の効いた心地よい部屋。一旦入ってしまえばしばらくは出たく無い…。時間もまだ早いから今から二度寝もありかな？

普段ならそんな誘惑に負けそうに、いや絶対負けるけど、今日という日は普段とはちょっと違うからそれは無しだ。

ベッドの上に無造作に置かれた黒いふたつ折りの携帯に目を遣ると、サブディスプレイの青いライトが点滅してる。メールが飛んできてる。

「こんな朝っぱらから…」

一番に蒼の顔が浮かんだ。何かあったんだろうか…。携帯を開き、決定ボタンを押すと、やっぱり蒼だ。

「は…？」

文面を読んで、思わず素っ頓狂な声が漏れた。

『どっちが先に店につくか競争だ！ 私が勝ったらアイスをおごること』

「馬鹿やろ…」

笑いを噛み殺しつつメールを返信する。

『負けるのはまちがいでなくお前だ』

蒼の悔しげな膨れっ面を思い浮かべて送信すると、数秒後にメールではなく通話着信のメロディーが鳴る。

「お前…何だよ、こんな朝早くから　『北村のばかばかああ
くっ!!』」

電話の向こうで蒼が喚くから、思わず携帯から少し耳を離れた。

『私が負けたら、北村がアイスをおごるんだからなっ!!』

「はああ？　勝ったほうってさっき　」

『うるさくいつ！　北村が勝ったらなんて書いてないっ！　私が勝
ったらって書いたじゃないかっ!』

「ちょっと待て、それじゃあお前が勝っても負けても俺はもれなく
アイスをおごらされるってことか!」

全くもって笑える理不尽さだなど、笑いを噛み殺しつつ、蒼の声
を待つけど、電話の向こう側は急に無音になった。

「蒼…?」

名前を呼ぶと、

『…北村あ…』

声のトーンが急に下がった蒼の声。

「…どうした…?　やっぱり不安か…?」

『…ちょっとだけ…ね…』

空気を脱いだ本当の蒼の声に、俺は小さく息をつき、

「昨日はちゃんと寝れたのか？」

そつと尋ねると、

『…実はあまり眠れなかった…』

申し訳なげな声が耳の奥を小さく揺らす。

『私…いっぱい迷惑かけるよ…きつと…大失敗を…』

蒼の声はどんどん萎れていく。

「はじめから何でもうまくやれる奴なんていないし、もし迷惑だと思ったら、昨日きつぱり断られてるだろ？」

俺は蒼をなるべく安心させてやりたくて、穏やかな声でゆっくりと語りかけた。

「洋二さんと俺の姉ちゃんを信じる。2人は絶対に蒼の味方だから。蒼なりに一生懸命やれば、誰もお前を責めたりしないから」

そう告げるけど蒼は、電話の向こう側で黙りこんだままだ。

「俺もちゃんと傍にいるから」

少し声を強めて、言葉に気持ちに乗せる。

『アイス…買ってくれるか？』

そうぼつりとつぶやく蒼に、

「7時15分に、コンビニでソーダ味のアイス買って待ってる。遅れたら食っちゃうけどな」

俺は笑みを含めて蒼にそう告げた。

『そつちこそ！ 1秒でも遅れたら、アイス2本だぞっ！』

まるで自分に気合いを入れるかのように、蒼は声を張り上げた。

「おう、俺が遅れたら何本でも買ってやる」

鼻を鳴らしてやったら、

『よしっ！ 絶対北村より早くコンビニに着いてやるからなっ！』

蒼はふんつと小さく息を吐き、

『ありがとう！ 北村っ！』

大声で叫ばれた後、電話が切れた。

「っ…耳、いてーし」

つぶやいたら、安堵の息が落ちた。

携帯を閉じてベッドに放り投げ、

「うっし！ 頑張るぞ！」

何となく気合いを入れて、俺は早足で風呂場へ向かった。

1日の始まり

「あゝっ！ 何だか緊張してきちゃった！」

店に向かう午前6時半過ぎの車内。助手席の葉月は何だかそわそわと落ち着かない様子で、

「あの子、寝起き悪いからなあ…。ちゃんと起きたかな…。電話してみようかなあ…」

携帯を見つめて、つぶやいてる姿をミラー越しにチラリと見て、僕は小さく苦笑を浮かべた。

「でもでも…」

携帯を開き、口を尖らせ、

「過保護過ぎるかなあ…」

葉月のつぶやきに、僕は堪えきれずに吹き出してしまった。

「やっぱりはじめ君に言われた事、気にしてたのか」

昨日カフェではじめ君啖呵を切ったわりには…。

葉月は結構言われたことを気にするタイプだからな。

「べっ、別に気にしてないわよう…」

ほんのり顔を上気させ、携帯を閉じて小さく鼻を鳴らすけど、どうやら図星のようだ。

「充月君は大丈夫だと思うよ。責任感が強そうだし」

「…責任感なんて強くないわよお…。あの子は昔からマイペースで

時間にルーズで…。蒼ちゃんに迷惑かけてなければいいけど…」

再度携帯を開き、ディスプレイを見つめてため息を落とした。

「…僕はどちらかと言うと、蒼ちゃんのほうが心配だよ」

昨日見た感じ、17歳にしてはちょっと思考や態度が幼いように思えたし、あまり人と会話をする事も好きではないようだし…。若干ドジッ娘の匂いもしたな…。今日はどんな手伝いをさせるべきか正直悩むところだ。

「え？ 蒼ちゃんは大丈夫だと思うわよ」

葉月は僕を見てにつこりと笑い、

「彼女は中々デキル感じがするつ。能ある鷹みたいな」

「…能ある…鷹…ねえ…。そう言い切れる根拠は？」

最早苦笑いしか浮かんでこない僕に、

「根拠なんてないわよ。ただの女の勘っ」

そう楽しみにそう言い放つ葉月。

「ははは…」

(…その勘はあまり期待できそうにないな…)

僕はやんわりと口元を歪めて小さく息を落とした。

旧道の左手に縦に広がる、僕が小さい頃から変わらない海は、早朝の淡い陽光に照らされて水平線がほんのりと光を含んでキラキラとまぶしい。

左側助手席の葉月をミラー越しにチラリと見ると、唇をきゅっと

結んで海を見つめていた。

「きっと大丈夫…。蒼ちゃんは、きっと元気に笑えるようになる…」

まるで自分に言い聞かせるかのように呟く葉月の言葉を耳にして、僕はやれやれと息を落とし、

「葉月、気負いし過ぎずだよ…」

一言声をかけた。

「…気負っちゃってるかなあ？」

視線を僕に向けてひとつ小さく笑うと、

「…頭ではダメだってわかってるんだけどね…」

ため息をついて、

「はじめ君の言った言葉が、耳から離れないんだよね…」

ぼつりと呟いた。

「心の傷って、時々人の表面上の優しさで更に酷くなる時があるって…。何だかあの言葉が胸に引っ掛かっちゃって…」

複雑そうな顔色で、葉月は再度ため息を落とし、

「…本当はちょっと怖い。蒼ちゃんのこと、ほとんどわからないでしょ？私、いつ、何時地雷を踏んでしまうか…どうしても考えちゃうよ…」

ミラー越しに不安そうな葉月と視線が合い、僕は、
「考え過ぎて慎重に接するよりも、普段通りの葉月でいればいいと僕は思うよ」

左手で葉月の頭をそつと撫でた。

「きつとそれが蒼ちゃんにとって一番いい事だと思う」
人に過剰に気を遣われるって事は、心に荷物を背負ってる時ほど余計に辛くなるって僕は知ってる。

高校に入学して間もなく、母を突然亡くした15のあの日、周りの大人や友人にかけられ続けた過剰な気遣いの言葉や態度は、僕にとつては重荷以外の何物でもなかった事を思い出す。

心配されれば、周りに心配ばかりをかけてる自分が情けない人間だって酷く落ち込んだし、過剰に親切にされれば「人の苦労なんて何も知らないくせにこいつ、ただの自己満足の偽善者だな…」と心の中で毒づいた事だってある。

そんな僕の歪みを正してくれたのは、まだ、ただのクラスメイトで、たまたま隣の席になった葉月だった。

驚くほど前向きで明るい彼女は、迷惑そうな僕の空気なんてほとんど無視して、グイグイと僕の心に入ってきた。

若干激しい喜怒哀楽の表情に、良いことも悪いことも気遣いなんて無しのストレートな言葉。

そして、思わず目を細めなくなるような、まぶしい笑顔。

葉月を好きになる事に、時間なんてさほどいらなかったな…。

「私は私のまま…か。…うん、そうだ、そうだよねっ」

葉月は俯き加減の顔を上げて、僕を見つめてキュッと口角をあげ、

「洋二がそう言ってくれるなら、間違いないっ」

僕の肩にしなだれかかり、へへっと笑った。

「…葉月…運転中」

僕はひとつ咳払いをして葉月を嗜める。

「やだ…照れちゃって、かわい〜」

おどけた声色で、ケラケラと笑い声をあげられると、否応なしに
気恥ずかしさが込み上げてくる。

「…いじめないでください」

僕は上気する顔の熱さをごまかすように苦笑いして呟いた。そんな僕を見て、さらに楽しそうに笑う葉月を横目で眺めながら、小さく安堵する。

緩やかな景色から、まだ賑やかさのない静かな朝の観光町にさしかかる。

車内の時計は午前7時少し前。

店まで後数メートルのところにさしかかると、

「あれっ？」

葉月は店を指さして驚き混じりの声をあげた。

「ははっ、どうやらいらない心配だったみたいだな」

僕も思わず笑い声をあげてしまった。

店の前の道路の向かいには、低い防波堤。
その上に腰を下ろして僕らの到着を待っているだろう二人の姿。

「出勤時間よりも1時間も早く到着なんて…」

葉月は感慨深げな、しかし柔らかな笑顔で呟いた後、パワーウィンドーのボタンを押して窓を開けて、

「おっはようっ！　ってか、二人共、早過ぎっ！」

静かな朝の町に、元気な葉月の声が響いた。

姉と仕事

「ったく…、早く着き過ぎだって。張り切り過ぎると体がもたないわよっ」

姉は楽しげに俺の背中を叩いてケラケラと笑うと、アイボリーのカフェエプロンを差し出した。

「……」

エプロンを無言で受け取り、半笑いして横目でジトリと蒼を見る。（7時15分にコンビ二って言ったはずなのに、6時過ぎにはもうコンビ二に着いて、早く来いとか催促の電話入れてきやがって…）おまけにマジでアイス2本とか…食ったしな。

俺の視線に気付いた蒼は、（なんだよ…私は何も悪くないんだからな）とでも言いたげなジト目を返してきた。

ほう…おもしれー。

後で覚えとけ。

「蒼ちゃんには、はい、これ」

蒼には洋二さんと同じ、少し丈の長い黒いエプロンを差し出して渡すと、

「今日から8月末まで、宜しく願います」

俺達に深々と頭を下げた。そんな姉にはっとして、

「あ、…こちらこそ…、宜しく願います」

姉弟関係なのにも関わらず、自然と敬語で俺も姉に深々と頭を下げる。

隣でエプロンを胸に抱き、数秒呆気に捕われる蒼だったけど、少し顔を赤らめて「宜しく…お願いします」とつぶやきながら頭をペコリと下げた。

「蒼ちゃん、今日はいいい格好だね　しっかり働けそうな服装。合格です」

シンプルな濃紺のＴシャツにゆったりとしたジーンパンに黒いスニーカーの蒼を見つめて、姉は満足げに笑顔に向けた。
そんな姉の笑顔に、蒼は無言だけど照れくさそうに、だけど嬉しそうに小さな笑みを浮かべた。

厨房からフロアへと顔を出した洋二さんは、

「じゃあ、早速だけど、葉月は充月君にフロア仕事を教えながら。蒼ちゃんは厨房へお願いします」

蒼の顔が緊張した表情に変わる。口をギュッとむすんで、両手を握る。

「大丈夫よ。私達を信じて」
姉は蒼の両肩に手を乗せて「リラックス」と笑顔を放った。

蒼は俺にほんの少し不安混じりな視線を向けたけど、（大丈夫だ、頑張ろう）って気持ちを込めて小さく笑うと、それに気付いてくれたのか、蒼は小さく頷き、ひとつ深呼吸をして、フロアに背を向け

た。

「がんばれ…」

蒼の背中を見つめて小さくつぶやいたら、

「あんたも頑張りなさいよ。蒼ちゃんに負けないようにね」

俺を見つめてニヤニヤと笑う姉に、否応なしに気恥ずかしさが込み上げて、

「んなことわかってる」

とりあえず、プイと視線を反らした。

「じゃあ、フロアの清掃を始めようか」

姉は元気よく「おっ」と右手をあげて、フロア奥の手洗い場へと歩き出した。

（全く…相変わらずこの人は朝からテンションが高いよな…）

姉の背中を見つめたら、小さなため息がでた。

（まあ…、元気ってことは、何事にも順調だったことだよな）

ため息とは言うものの、安堵の気持ちが混じる、悪いため息ではなくだけど。

「掃除用具はここにあるからね」

姉はトイレの右手奥にある縦長の扉を開けて、丁字型のホウキやモップを取出して、

「まず、朝一番にすることは店の掃除よ。お客様を気持ち良く迎える為に、フロアとトイレはいつでも綺麗にしとかなきゃね」

姉は俺にモップとバケツを渡して、ニカツと笑う。

「トイレ掃除をする時は、トイレ手前のドアを開けたら、そこに掃除道具や備品が入ってるからね」

姉は説明しながら、店の出入口のドアを開けて、マットを花壇の煉瓦の囲いに干すように置いた。

「掃除が終わったら、表の花壇と店内の観葉植物に水やりをして、レジを開けて、入り口のホワイトボードに今日のメニューを書いて、開店準備は終了よ」

ホウキでフロアを丁寧に掃きながら、大まかな仕事の流れを説明する。

「充月、掃き終えた場所からモップかけて」

姉はそう俺に告げると、店内に流れる歌を鼻歌混じりで歌いながら、慣れた手つきで作業を進めていく。

フロアを掃き終えたら、姉は雑巾で全席の椅子を拭き、最後にダスタークロスでテーブルを丁寧に拭いて、メニューや塩の入れ物、爪楊枝等をテキパキと整えていく。

俺がモップかけてる間に、フロアの仕事は殆ど終わってしまった…。

「モップがけが終わったら、トイレ掃除ね。とりあえず慣れて貰う為に私は見てることにするから」

姉はそう言って、自分が率先して動くではなく、俺の作業を見る

側に回った。

モップをかけ終えて、掃除道具を片付けた後トイレ掃除に取り掛かる。

その間に、掃除に対する細部の注意を受けながら、何とか掃除を終えた。

「ふう……」

フロア内は冷房が効いてて涼しいけど、体を動かせばやっぱり少し汗ばむ。

でも、隣で鼻歌混じりでホワイトボードに今日のランチメニューを書き込んでる姉は、あれだけ体を動かしてたにも関わらず、暑さなんて全く感じてないみたいに涼しげな顔してる。

（流石…伊達に5年とか続けてるわけじゃないよな）

ちよつとだけ姉を尊敬した。ちよつとだけな…。

（つーか、蒼は大丈夫かな…）

厨房を横目でチラリと見ると、カウンター側に蒼の俯き加減の頭が見えた。

洋二さんは、厨房の奥で、蒼に背を向けて作業してる。

何をやってんのかはここからは見えないけど、その顔はかなり真剣で。

（がんばれよ…）

思わず心の中でつぶやいた。

「かわいい彼女に見惚れてないで、花壇に水やりっ！」

「……」

後ろから姉にコッソンと頭を叩かれて体が驚き跳ねる。姉に顔を向けたら、案の定すっぱーニヤニヤしてた…。

「……」

くそっ、なんか恥ずかしい…。

俺は熱くなる顔をこまかしつつ、姉に軽くジト目を向けた後、早歩きで店の表に出た。

厨房内

「それでは、今日から宜しく願います」

僕は蒼ちゃんにひとつ礼をする。

「よ…宜しく願います…」

蒼ちゃんは、そんな僕に向かい頭を下げてつぶやいた。相変わらずの『挑む目力』を込めて…見られてる。

「蒼ちゃんは、料理はした事あるかな？」

僕はとりあえず笑みを返し、彼女がどれくらいのことが出来るかをやんわりと探ることから始めようと思い、質問をした。

「料理は…晩ご飯を毎日作っています…」

蒼ちゃんは、急に気持ちが失速するかのように僕から視線を外して小さくつぶやいた。

(…触れてはまずかったかな)

一瞬そう感じたけど、敢えて空気は読まないことにする。余計な詮索や気遣いはぎこちなさと無駄な距離を生むだけだから。

「へえー、毎日夕飯を？ それは偉いね！ 得意な料理ってあるかな？」

彼女が普段どんなものを作っているのかも尋ねてみる。

実は申し訳なくも、僕が抱く彼女の印象は、頑張って目玉焼きならイケるかなってイメージだったから、かなり驚いたつても本音だ。

「和食のほうが得意です」

蒼ちゃんからの返答はそれだけだった。でも瞳が少しだけ大きくなり、顔はほんのりと嬉しそうだ。

（和食が得意なら…基本的な事は大丈夫かもな）

「和食が得意なんて、凄いね。…よし、それじゃ、まずはモーニングの準備をしようか」

僕は冷蔵庫を開けて、卵を15個ボールに取出し、

「ゆで卵はこの鍋を使ってね」

ガス台の下に並べてある中位の片手鍋を指差した。

「ガスレンジは、家庭用とちよつと違うから、安全の為に使い方をしっかり覚えてね」

僕は彼女にガスレンジの使い方を教えた後、

「それから」

冷蔵庫を閉めると、扉に貼りつけてあるマグネットタイプのデジタルタイマーを指差して、

「ゆで卵の時間はガスに鍋をかけてから20分です。卵のお湯は沸騰したらすぐにガスを中火にしてください。茹で卵がヒビたり、割れないようにね」

そう説明すると、蒼ちゃんは僕に再度目力を向けて「はい」と頷いた。

「では、ゆで卵作りをお願いします。茹であがったら、ここに鍋を入れて、水で充分冷やしてね」

中央の調理台の端に備え付けられてるシンクを指差した。

「僕は今からアイスコーヒーとランチの仕込みをするから、ゆで卵を作りながら、仕込みの大体の流れを見ててください。それでは、始めましょう」

僕の開始の声を聞き、蒼ちゃんはひとつ、しっかりと頷いて、ゆで卵作りに取り掛かった。

僕はいつものようにステンレス製のポットにお湯を沸かして、機械でアイスコーヒー用の豆を挽き、中型の寸胴にセットした大きめの麻の袋に挽いた豆を入れて、コーヒーをドリップして水を張ったカウンター裏のシンクで寸胴を冷やす。それからランチ用のミニサラダに取り掛かる。

冷蔵庫からキャベツを取出し、中央調理台にまな板とステンレス製の網目状の水切り用ボールとボールを重ね置き、牛刀でキャベツを千切りにしていく。

切り終えたキャベツをボールに入れて水にさらしておき、その間にきゅうりやトマトを切り、プラスチック製のタッパーに詰めた。最後に飾りとして使用するホールコーンやパセリを小さいステンレス製の四角い容器に詰めてサラダの仕込みは終了。

キャベツを水でさらし終える頃合いに、ゆで卵のタイマーが鳴る。蒼ちゃんは、ガスレンジの火をしっかりと消して、シンクに鍋を入れて水を流し入れた。

僕は仕込みを済ませたサラダの材料を冷蔵庫にしまい、ゆで卵の出来具合を確認する為にシンクを覗いて、

「うん、とても綺麗に出来てるね。合格です」

笑みを向けると、蒼ちゃんは安堵の色をのぞかせて、小さくほつと息を落とした。

「じゃあ次は、ホットコーヒーの準備だ」

僕は、蒼ちゃんと一緒に倉庫へ行き、

「これがアイス用の豆で、こっちがホット用の豆だよ」
ホットコーヒー用の豆を機械にかけて挽き、コーヒーメーカーにセツトする。

「朝の仕事は大体こんなところだよ。後は開店したらモーニングのお客様をさばきながら、ランチの段取りをするんだよ」

大まかに説明をしながら、アイスコーヒーの冷め具合を見る。うん、いい具合だ。

「アイスコーヒーは、このアイス用ポットに移し替えて、冷蔵庫に入れておくんだ」

僕はあらかじめ用意しておいた2つのステンレスポットにアイスコーヒーを移し替えて、

「蒼ちゃんは、コーヒーは苦手なんだよね？」

尋ねてみた。

（昨日来た時はアイスティーだったからな…）

「…苦い飲み物は苦手です…」
蒼ちゃんは仏頂面でつぶやいた。

「あ、そうだ。ガムシロとミルクを出さなきゃ」

僕はアイスコーヒー用の冷蔵庫からガムシロップとミルクの入った袋を取り出し、

「このプラスチックケースにガムシロとミルクを補充してください」

カウンター裏の調理台の上を指差して、彼女に袋を差し出した。

「……」

蒼ちゃんは、息を詰めるように、無言で恐る恐る僕に手を伸ばして、それらを受け取ると、深く息を吐いて安堵の色を見せた。

そして、僕にくるりと背中を向けて、ケースに補充を始めた。

（中々打ち解けた会話ができないな……。まあ、仕方ないな……。焦らずいこう）

僕は苦笑いして、冷蔵庫からスープストックを取出し、デミグラスソース作りに取り掛かった。

回想

「あ…っつ…」

花壇に水をやる為に店から表に出た矢先に、照りつける日射しと湿り気を帯びた熱い海風に包まれて、思わず夏のお約束の音が漏れた。

店の横にある水道の蛇口をひねり、取り付けられたシャワータイプのノズル付きホースを伸ばして、花壇に植えられたアイビーに水をまき、湿った土の匂いを感じると心なしか涼しくなるような。いや、多分気のせいだな…。容赦なく直射日光が当たる背中が暑い。

渴いた葉が潤うかのように、褪せたような薄い緑色が水滴を纏い、濃い緑へと変わる様子を眺めながら、厨房内で真剣な顔をして何かしらの作業をしていた蒼を思い出す。

（あいつがあんなに真剣な顔を見せるなんて、どれだけぶりだろう…）

蒼と初めて言葉を交わした、去年のあの日をふと思い出した。

「…出会いは最悪だったな…うん…」

歩道橋の上で、ぼんやりと下を見つめてたあいつは、今にもそこから飛び降りてしまいそうな…、そんな重い空気に満ちてた。

進藤蒼は、隣のクラスの訳ありな女子だった。

高校に入学して初めての夏休みの学校内で起きたある事件のせい
で。

事件の数時間前に、学校の裏サイトに写真付き、名指しでこう書き込みされてたらしい。

『進藤蒼は、未来永劫僕のものだ』

そんな文章から始まり、2人がどれだけ濃密な関係だったかが、事細かく書き綴られていたんだとか。

そして、最後に

『僕は天国から君を見守っています。たとえ君が僕を裏切ったとしても、僕はやっぱり君を愛してるから』

そんな書き込みを遺して、ひとりの教師が夏休みの校内で自らの人生に終止符を打った。

サイトの書き込みは、夏休みでパソコン利用者が多いこともあって、瞬く間に生徒に話が広がった。

本当の理由や、加害者扱いされた、被害者の蒼を置き去りにして
…。

俺には蒼の訳あり事情なんて大して興味のない事だった。でも、学校で生活をしてれば嫌でも耳に入ってくる蒼に対しての冷ややかな言葉や噂話に、どこかしら苛立ちを感じてたのは否定しない。

『よく学校に来れるよな』

『あたしなら、あんな事があつたら絶対学校辞めるし』

『どうゆう神経してんだか』

『いや、ぶつちやけ神経とかないんじゃない？』

『なんか、気持ち悪いよね…』

『関わらないほうがいいって。呪われるよ』

廊下を歩く蒼を遠目で見ては、嘲笑を交えた蔑みの言葉をあからさまに、平然と吐く輩。

聞こえてるはずなのに、無反応、無表情な蒼を見かけると、言い表し様のない感情が足の爪先から心臓へと登ってくるような感覚に陥った。

あの日、俺は歩道橋の上にぼんやりと立ってた蒼の肩を掴んで叫んだ。

「何やってんだよ！」
って。

蒼は俺の手を肩を回すように退けて、

「景色を眺めてるだけなのに意味わかんない…」
俺に顔や体を向けないまま、抑揚のない、無感情な言葉をつぶやいた。

「は？ 景色を眺めてた？ 嘘つけ！ お前、今絶対」

「死ぬ気があるなら、もっと早くにあの世にいつてる」

蒼は俺の言葉を遮るように冷たい一言を放った。そんな蒼の言葉に、俺は思わず黙り込んでしまった。

蒼はやや下に落とした視線を上げて、少し遠くに見える灰色の海を見つめて、

「ひとりがいい…。だから邪魔しないで」

目に少しかかる長さの黒くて真っ直ぐな前髪が、風で後ろにさらりと流れる。丸い額が露になり、漆黒に濡れる睫毛と、色素が少し薄い瞳がはつきりと見えた。

その瞳は冷たいガラス玉みたいだった。

「同情されるなら、蔑まれたほうがずっと楽」

蒼は抑揚のない声でぼつりとつぶやいた。

「同情なんてしてねーよ」 凶星をさされて、思わず虚勢を張った俺に、蒼の瞳が向けられて、

「何も知らないくせに。知ったかぶりして近づいてくる偽善者って大嫌い」

冷たい言葉と反して、蒼の瞳は、驚くくらい強くて、真っ直ぐで真剣で…。

あの時の事を思い出したら、否応なしに苦笑が込み上げる。けど、それと反して、今、少しずつ笑顔でいる蒼を思い浮かべて安堵感に

包まれる。

水をやりながら、出窓から店内のカウンター奥をチラリと覗き見ると、蒼は洋二さんの隣で何かをじっと見つめてる。

(…こんな短時間でかなり距離が縮んでる…)

さすがはつくしの人。

洋二さんの柔かな性質は、まさに心地よい春の陽気みたいだからな…。

嬉しさで笑いが小さく込み上げた。その時、

「おっ、葉月ちゃんの弟っ！」

背中から急に浴びせられた男の声に、思わず体が跳ねた。

「……………」

無言で振り向くと、

「よっ」

つと軽く手をあげて涼しげな笑みを浮かべる、黒髪の男の人が立ってた。

厨房内2

「よし、これで一通りの仕込みは終わりです。後は開店を待つだけだよ」

僕は蒼ちゃんに小さく笑みを送った。

「…はい」

俯き加減で安堵の息をつき、ほんの少しだけ緊張した表情を緩ませて、蒼ちゃんはぼつりとつぶやいた。

「初日だから、きつとわからないことだらけだと思うけど、気が付いたことは何でも遠慮なく聞いてね」

そんな僕の声掛けに、

「…メモ…を…取りたいのですが…」

蒼ちゃんはジーンパンの後ろポケットから小さなメモ帳を取出して、恐る恐る僕にかざした。

「残念だけど厨房内でのメモは禁止です」

笑みを絶やさずに一言告げると、

「…メモしなきゃ、忘れちゃう…」

口を少し尖らせて、蒼ちゃんに上目遣いで僕に目力をむけるけど、

「厨房の仕事は頭ではなく、体で覚えることが大事なんだよ。段取りや調理にはマニュアルはないから、体にたたき込まなきゃいけないことばかりだからね」

僕は、大事なことをしっかりと伝える為に真顔で真っ直ぐに蒼ちゃんを見た。

「段取りの時間配分、目安とする調理の時間。厨房の全てに於いて、体内時計を正確に動かすことができないと、お客様にご迷惑をかけることになるんだよ」

僕はカウンター側調理台のステンレスの引き戸をスライドさせて、ゴールドリンク用のグラスを4つ取出し、厨房出入口にある製氷機へ歩き、グラスに氷を入れる。

「体内時計…。体にたたき込む…ですか…」

ちよつと難しがった顔を見せて、そうつぶやく蒼ちゃんに、

「たとえばさ、蒼ちゃんは夕飯を作る時…そうだなあ、煮物なんかする時は支度時間や煮る時間、調味料の配合量などを量り考えて作ってるかな？」

僕は蒼ちゃんに尋ねた。

「…そういう時間…気にしたこと…ないです。調味料も目分量だし…」

「そうだろうね。それが『家庭の料理』の醍醐味でもあるから」
僕はひとつ頷き、呼吸を置いた後、

「でもね、僕らがお客様に提供するのとは、たとえ小さなカフェとはいえ、目分量の家庭の料理ではなく、お金をいただくプロの料理です」

いつでも変わらぬ味の提供と、お客様をなるべくお待たせしない、無駄な時間を省いたスピーディーな調理や事運びに加えて、どんな些細なことでも気配りのできるゆとりと視野を持つこと。

これが、厨房での大切な仕事なんだって心構えを、僕は蒼ちゃんに身を持って知って貰いたいと思う。

それは、決して短時間では身につけることができないことが当たり前なんだって事を、しっかりと自分に言い聞かせながら蒼ちゃんに向き合う。

僕にとっても新しい学びの時だ。

普段通り仕事を進めながら、彼女のメンタルも伺いながら、ゆっくりと確実に教え込む作業に緊張しないわけがないけど、そんな感情を前に出しては彼女が大なり小なり不安になるだろう。

なるべく平静に。いつでも変わらぬ味を提供するには、調味料の配分をちゃんと覚えなければいけないし、ゆとりある視野を持つ為には、しっかりと段取りや時間配分を身につけて、頭ではなく、体で備えることが大切だってことを蒼ちゃんに伝えた。

僕も父から、時には厳しく、時には笑いを交えてしっかりとそれらをきつちりと体にたたき込まれたからだ。

（申し訳ないけど僕には笑いを入れるゆとりがないけどね…）

「メモに頼ると、メモを追う時間のロスが生まれるんだ。この仕事は実地経験を重ねないと、身につけられないことの方が多いしね」僕は、冷蔵庫からアイスコーヒーと業務用のアイスティーを取り

出し、

「こうしたドリンクを注ぎ入れる量だって、メモをするより、ひとつでも沢山自分で作ったほうが分量の感覚を早く覚えられると思うよ」

氷の入ったグラスのひとつにアイスコーヒーを注ぎ入れた。

「お客様に出すドリンクの量は基本グラスの8分目です。見た目もそうだけど、ウェ이터が運ぶ時にも難の少ない適した量つてやつだよ」

僕は、蒼ちゃんに残り2つのグラスにアイスコーヒーを注ぎ入れるよう促した。

「…8分目…8分目…」

ゆっくりと丁寧にグラスに注ぎ入れる蒼ちゃんの慎重さと真剣な顔を見て、思わず顔が綻びそうになるのをこらえた。

「あ！ 入れすぎたっ！」 僕の入れたグラスとの僅かな量の違いに、思わず力のこもった悔しそうな声を上げた蒼ちゃん。

(…なるほど…これが、素の彼女の声か)

ちらりとだけど、漸く見えた蒼ちゃんの素の感情に、僕は心の中で安堵した。

「簡単そうで…中々難しいですね…」

そうつぶやきながら、もうひとつのグラスに再度アイスコーヒーを注ぎ入れる。

「あうっ！ また入れすぎたっ！」

落胆してグラスを見つめる蒼ちゃんに、

「これから、僕らの休憩のドリンクは蒼ちゃんが入れてください」

僕は笑みを向けて、

「それに慣れたら、お客様用のドリンクを蒼ちゃんに任せます。しっかり練習してね」

そう告げると、

「よし、じゃあ、カウンターにドリンクを出して」

僕はアイスティー作りを教えた後、蒼ちゃんに声をかけた。

カウンターには楽しげに厨房でのやり取りを見つめる葉月が、蒼ちゃんが注ぎ入れたアイスコーヒーのグラスを待ちわびてる。

「あっ！ しまった！ 水やりしてる充月のことすっかり忘れてたっ！」

葉月はフロアに不在の充月君を思い出し、

「ちよつと声かけてくるから待っててねっ」

眩しい笑顔の後、軽やかな足取りで、店の出入口のドアの向こうに消えた。

「ひまわりだ……」

葉月の背中を見つめてそうつぶやく蒼ちゃんに、僕は思わずはっとした。

その顔は、とても柔らかで楽しげな笑みを浮かべていた。

（ひまわり……か）

蒼ちゃんが感じた葉月のイメージが僕と同じことに嬉しさを隠せなくなり、思わず口元が緩む僕を横目で一瞬ちらりと見た蒼ちゃんは、

「…つくし…」

ひとつにやりとした笑みを浮かべて、つぶやいた。

…つくし???

え? つくしって…なんだろう…?

僕は、小さく咳払いと苦笑いをして、出入口を見つめた。

気になる人

「…あの…」

（誰だ…？ この人）

振り向いた目の前に涼しげな笑みを浮かべて立つ、やや長めの黒髪（髪）の男の人は、俺の記憶のどこを探っても見当たらなかった。

姉の事を知り、親しげに『葉月ちゃん』て呼ぶことは、店の常連客だろうか…。

いけないとは思いつつも、いきなり知らない男に声をかけられ、眉間に少しシワが寄る。

「あの…、どちら様でしょうか？」

男の人を探るように見つめてそう尋ねると、

「あー、俺？」

そう言った後に店の並びの民宿『波音』（なみね）を指さして、

「俺、あそこで住み込みのバイトしてんの。でもって、アイビィ（アイビー）の常連」

にこやかに笑って、軽く身のうちを明かした。

（やっぱり常連客か）

「すみません…、俺、今日から手伝い始めたばかりで何も知らなく

て…」

とりあえず頭を下げた。

「うん、昨日葉月ちゃんからさらっと聞いた。彼女と一緒に夏休みの間、店手伝うんだって？」

「はい…」と返答し頷きつつ、男の人を観察する。

黒いVネックのTシャツに、カーキ色のカーゴパンツ。なんか見た目ひよろりとして、若干病弱そうな肌の色だ…。

（なんかすげー太陽が似合わない人だな…）

「ねえ、彼女って」

「ちよつと！ はじめ君つ！！」

カウベルの音と同時に、ちよつと怒気を含む姉の声が響いた。

「おつ、葉月ちゃん、おはよー。今日も変わらぬかわいさだね」

「よつ」と手をあげる、はじめ君と呼ばれる男の人は、にっこりと笑って姉に声をかけた。

「…充月、休憩時間だよ。蒼ちゃんがアイスコーヒー入れてくれたから店戻って」

姉は若干ひきつった笑顔を俺に向けた。

「あ、いや…でも」

話しかけられた人は、店の常連さんなわけだから、話の最中に店に休憩に戻るなんて、ちよつと失礼じゃないか？

そんな事を考えつつ姉に視線をやると、

「いいから早く行つて」

今度は真顔でそう言い切られた。

「…わかつたよ…」

何だかわけのわからないまま、姉の迫力に気圧されて、俺ははじめさんに会釈して店内へ戻るために踵を返した。

「またね、弟クン」

姉の真顔に反するように楽しげな笑みを浮かべて、はじめさんは俺に軽く手をあげた。

（なんなんだ…？ わけわかんね…）

小さく息を吐いて、店内に戻ると、カウンターの奥から蒼と洋二さんが横並びでこつちを見てる。

「あれ？ 充月君、葉月は？」

「あ、外でお客さんとなんか…」

洋二さんにどう説明したらいいのか躊躇した。

揉めてるつてのはちよつと違うような…。でも、和気あいあいと立ち話つて感じでもないし…。

思わず苦笑がこみあげた俺を見て、

「はじめ君だな…」

洋二さんは、俯き加減でやれやれと苦笑いして、厨房から出てきた。

（何で相手が誰かわかつたんだ…？）

疑問符を浮かべてしまい、はい、と返答ができずに洋二さんに視線をやると、

「ちよつと2人で休んでて」

やんわりとした苦い笑みを浮かべて表に出ていった。

「…どうなつてんだ？」

まさか、姉を挟んでのちよつとした三角関係とか…

「…ははっ、んなわけねーか…」

漫画やドラマやあるまいし…。

（っ！か、あの人、俺に何を言いかけたんだろ）

そんな事を考えながらカウンターへと歩くと、

「北村っ！」

カウンター厨房側から蒼が俺を呼ぶ。その顔は、上気して結構楽しそうだ。

カウンター席に腰掛けると蒼は、

「お、お疲れ…様」

照れくさそうにカウンターへ手を伸ばして、アイスコーヒーを俺の前に置いた。

「お疲れ、ありがとう」

短く礼を述べて、俺は早速渴いた喉を潤す。

「…どうだ？」

蒼は、俺をじつと見つめて様子を伺うけど、

「え？ 何が？」

意味がわからず聞き返す。

「アイスコーヒー…どうだ？」

蒼は若干口を尖らせて再度俺に尋ねた。

「えっ！　もしかして、これ、蒼が作ったのか？」

思わず目を見開き、蒼をじっと見つめて返答を待つと、

「作ったんじゃないっ！　グラスにアイスコーヒーを注いだんだっ
！」

膨れっ面で声を荒げた。

「ちよっ、注いだけって…」

いや、それでどうだ？　と聞かれても…。

「…馬鹿にしたな？　注いだけって言うけど、これが中々難しい
んだぞっ！」

蒼は洋二さんから教わった、ドリンクの量を俺に話した。その顔
は熱心でいて、すごく楽しそうだ。

「8分目をクリアしたら、お客様に出すドリンクを任せて貰える事
になった」

蒼は嬉しそうにアイステイーを飲んでほかにんだ。

「そっか、がんばれよ。…なあ、洋二さん、近くても大丈夫か？」

先刻、横並びだった2人を思い出して蒼に尋ねてみた。

「…つくしだと思えば、平気だっ」

蒼は小さく笑みを浮かべて鼻を鳴らした。

「ちよっ、お前、つくしって…」

吹き笑いしそうになった俺に、

「北村のお姉さんの彼氏さんの事…どうやって…呼んだらいいかな…?」

蒼は照れくさそうに尋ねた。

「…オーナーでいいんじゃないか?」

(ぶっちゃけ洋二さんとは呼んで欲しくない…って心情は伏せとこ
う…)

俺は小さく笑って蒼を見た。

「…オーナー…」

蒼は、ひとつつづばやいて出入口に視線をやった。

「つーか、姉ちゃん達、外で何やってんだろ?」

野次馬心がうずく俺の心中を察したのか、蒼は厨房から出て、

「…あそこからちょっと覗いてみたらどうだ」

出入り口横の出窓へと歩き出した。

「いやっ、お前、それは良くないと思うぞ」

…とは言え、俺も忍び足気味で出窓へと歩き、こっそりと外を覗いてみた。

「…北村のお姉さん、何だか怒ってるみたいだな…」

腕組みをして膨れっ面の姉を見て、蒼はつぶやいた。

「…そうなんだよ…、あの男のお客さんを見たら、姉ちゃんすげー不機嫌になってさ…」

はじめさんと姉の真ん中に割って入る形になってる洋二さんは、苦笑いを浮かべて何かを話しているのだが、会話がうまく耳で拾えない。

「まさか…、つくしのライバル…？」

蒼は再度小さくつぶやいた。

「…いや、よくわかんねーけど…」

俺は苦笑して息をひとつ落とした。

「ヤバイっ！ 戻ってくるぞ！」

蒼は慌てた声を出して走り出す。その後に俺も小走りして互いの位置へ戻り、素知らぬ振りで、銘々の飲み物を喉に流し入れた。

店外

（やれやれ…全く…）

僕は止む事のない苦笑いと、深いため息をひとつ落として店の表で向き合う2人に歩み寄る。

「充月に余計な事言わないでって言ったじゃない」

葉月の声はなるべく声を荒げずに平静を保とうとしているのか、単に頭に血が上りすぎて引いてるのか…。

普段よりも格段に声のトーンが低い。

（多分両方だな…）

普段滅多に見せない冷淡な表情がそれを物語ってるというのもある…。

「別に余計な事なんて。オレはただ、弟クンを見かけたから、挨拶程度に声かけただけでしょ？」

はじめ君は、普段通り涼しげな笑みを浮かべながら、葉月の牽制を受け流してる感じた。

「それは本当に世間話なのかしらね？ …世間話という名のネタ集めじゃなければいいんだけど」

葉月はにっこりとした笑みをはじめ君に向けたけど、僕には全く笑ってないように見えた。

「ネタ集めなんて人聞きの悪い。取材って言って欲しいな」

はじめ君は肩を揺らして楽しげに笑った。そんなはじめ君を見て、

「言つとくけど、はじめ君に提供するネタなんて一個もないから鼻をひとつ鳴らして、

「蒼ちゃんには絶対に近づかないでね。蒼ちゃんは絶対にあなたが苦手だと思うから」

これでもかと言うくらい冷たい言葉をはじめ君に放つ。

「本当、葉月ちゃんて可愛いな」

はじめ君は愉快そうにクスクスと笑って、

「でもって、相当な過保護だ」

長い前髪から少し覗く、切れ長の瞳は、明らかに葉月を挑発してのように感じた。

（これ以上はマズいな…）

「2人共、いい加減その辺で止めときなよ」

僕は2人の間に入って険悪な空気を断ち切ろうと声をかけた。

「洋二は黙ってて。これはウチの家族の問題でもあるんだから」

「葉月の家族の問題なら、間違いなく僕の問題でもあるわけだから、黙るつもりはないよ」

怒りに少々我を忘れてる葉月には、回りくどい言葉よりもストレートな言葉のほうがよく届く事を僕は知ってる。

「言つたろ？ 気負い過ぎるのは良くないって」

葉月に真っ直ぐ視線を向けると、はっとした表情を浮かべて、

「…ごめん。熱くなり過ぎ…」

俯いてしょんぼりとした声を地面に落とした。

「はじめ君…」

僕ははじめ君にも真っ直ぐに視線を向けて、

「葉月の失礼な態度、本当にすみませんでした」
そう言って頭を下げた。

これは、店の主としてのケジメの謝罪だ。

「それから、充月君と蒼ちゃんのプライベートに関しては、深く立ち入ってくるのはどうか止めてください」

僕はひと呼吸置いて、

「店側の人間にも、プライバシー保護の権利はあります。それに彼らは未成年者で、まだ感情だって行動だって全てに於いて未成熟です」

葉月は唇を噛みしめてははじめ君を見つめてる。

「僕らは僕らのやり方や考え方で、ゆっくりと彼らを見て成長を助けてあげるつもりです」

明確で的確、迅速な救済なんて、まだまだ未熟で不器用な僕らには到底無理だ。

だから、今僕らの力で最大限出来ることをやる。
「その為には、葉月の元気な笑顔が必要なんだよ」

僕は、萎れた顔の葉月に小さく笑みを向けた。
蒼ちゃんが見せた柔らかい笑顔と、葉月をひまわりみたいだって言
ってくれたことは、僕には蒼ちゃんにとって、とても大切なひとつ
の感情だっと思ってたからだ。

きっとこれからも、葉月の前向きさや笑顔は僕らの大きな救いにな
ると思う。逆に僕も彼女が無理して笑うではなく、いつでも自然
と笑顔になれるように傍にいたいと思ってる。

「蒼ちゃんが、葉月はひまわりみたいだって。さっき、いい笑顔見
せてくれたよ」

僕は、葉月にそっと耳打ちした。

「本当に…?」

葉月は顔を上げて、嬉しそうに目を見開いた。僕は、小さく笑っ
て頷いた。

「さあ、店に戻ろう。蒼ちゃんが入れたアイスコーヒー、飲まなき
ゃ」

「そうだっ！ アイスコーヒーっ！」

葉月は思い出して、

体を店の出入口へ向けた。

「べーだ。はじめ君のばーかっ！」

葉月なりのリセットなのだろう。そう言って、舌を出して些かス
ツキリした顔で店内に消えた。

「本っ当に可愛い娘だな」

はじめ君はケラケラと笑って頷いた後に、

「…やっぱオレ、オーナー嫌いだわ」

そう言って僕に毒を吐いたけど、顔は何だか嬉しそうにも見えた。

「僕は嫌いじゃないですよ。はじめ君の事」

苦笑いして一言告げると、

「…いや、悪い。オレはそういう趣味はないから」

引いた声で口元を歪ませた。

「いやいやいや！ 僕だってそういう趣味はありませんよっ！」

思わず上げてしまった大声に、はじめ君は愉快そうにケラケラと笑い声を上げて、

「ま、頑張ってね」

ヒラヒラと手を振り、波音に向かい歩き出した。

そんなはじめ君の背中を見つめつつ、僕は深く息をついて苦笑いした。

（…ウチの家族の問題…か）

先刻葉月が放った言葉を思い出したら、少しだけ胸がチクリと痛んだ。

「…まあ、仕方ないか…。僕らはまだ家族じゃないわけだしな…」

これ以上の苦笑は浮かべたくない。そう思っ^て何となく空を見上げた。

「こら！ よーじっ！ 何サボッてんのよっ！」

足元から聞こえた、おしやまな幼子の声に僕は、はっと我に帰る。

「あ、舞花ちゃん…おはよう」

僕は、目線を下に落として、やっぱり苦笑してしまうわけで。

「おはよう、洋二君」

少し離れた場所から聞こえる低く耳触りの良い声に顔を向けると、二軒先のサーフショップのオーナーの和俊さんが僕に笑みを向けて歩いてきた。

（開店時間だ）

いつも一番に来る常連さん父娘を見て、僕は気持ちを切り替えた。

来客

店内にカウベルが鳴り響き出入口に視線を向けると、さっきは怖い顔して怒ってたっぽい姉が上機嫌な笑顔でこちらを見て歩いてきた。

「ごめんねっ！　せっかく蒼ちゃんが初めてアイスコーヒー入れてくれたのに」

カウンター席、俺の隣に腰掛け蒼を拝むように手を合わせて蒼を見つめると、

「…氷…だいぶ溶けちゃったのですが…」

蒼は、姉にどうしたらいいのか助けを求めるような視線を送ってつぶやいた。

「氷が溶けててもいいわよ　そのままちょうだいっ」

姉は蒼に向かい声を弾ませた。

（…問題は解決したんだろうか…）

「姉ちゃん、洋二さんは？」

まだ外から戻らない洋二さんが気になって、尋ねてみたら、

「洋二、うん。すぐ来るわよ」

問題ないと言った笑顔で短い返答がきた。

「…お…疲れ様…です」

蒼が照れくさそうに、姉にアイスコーヒーを差し出すと、

「ありがとう　　ねえ、蒼ちゃんもこっちでちょっと座りなよ。」

立ちっぱなしで足、疲れたでしょ？」

姉は蒼に手招きをして、カウンター席に呼ぶけど、

「私はここがいいんです」

蒼は、やんわりと首を横に振り小さく笑みを浮かべた。

「そっか。蒼ちゃん、厨房の仕事はどう？」

アイスコーヒーに刺さるストローをくるくると回しながら、姉は蒼に尋ねた。

「…まだまだ知らないことばかりですが…」

少し俯いてひと呼吸置いた蒼は、

「ちよつと楽しいかも…」

照れくさそうに、そうつぶやいた。

「楽しいなら良かったっ！ あ、ねえ、洋二はどう？ 話し方が態度とか厳しすぎないかな？」

「…オー…ナーは、大丈夫です。とても親切です」

（あいつすげー照れてる）

真っ赤な顔でつぶやいて、アイステイーを飲む蒼を見て、俺は込み上げる笑いを堪える為に俯いた。

そんな俺に気付いたのか蒼は、

「…北村…私を馬鹿にしてるのか…？」

更に赤くなり、プルプルと小さく震えながら、口元を歪ませた。

「んもうっ！ 蒼ちゃんったらかわいっい」

蒼を見て姉は小さく悶えて、

「やっぱり弟より妹よねっ！ 断然妹がいいわよっ！」

「隣に実の弟がいるのに、失礼じゃね？」

俺は鼻を鳴らして姉にじと目を投げてやったけど、

「弟はおっきくなると冷たくなるからやだ」

ははんと笑ってじと目を返された。

「べつ、別に…冷たくなんか…」

してないとも言い切れないか…。高校入ってから姉に隠し事とか増えたしな…。

「いいのよ、充月に冷たくされても、私には蒼ちゃんと言っかわい…妹分ができたんだから」

姉は、「弟はお払い箱って事で」と蒼に向かって笑顔を向けた。

…何それ、酷くね？

俺は、やれやれと苦笑を浮かべて盛大にため息をついた。そんな姉弟のやり取りを見て、蒼は楽しそうにクスクスと笑って肩を揺らした。

そんな蒼を見て、安堵の笑みを浮かべた姉を横目で見て、ほんの少しだけ申し訳なさが胸に滲んだ。

その時、カウベルが鳴り響き、俺達は一斉に視線を出入口へと向けると、

「はーちゃんっ！ おっはよっ」

金髪ショートヘアの…

（うつわああ…、何かミニマムなギャルがきた…）

かなり派手な幼女が姉の元へと駆けてきた。

「おっはよー 舞花ちゃんっ、今日も朝からバッチリ決まってじやな〜い」

姉は椅子から立ち上がり、両手を広げてちびっこを胸で受け止め、抱き上げた。

「おはよ、葉月ちゃん」

「和俊さん、いらっしやい」

出入口からこちらに歩み寄る、明るい茶髪に小麦色の肌の男性が、姉に向かって手を上げた。

（お客さんっ！）

俺は立ち上がり、

「いらっしやいませ！」

と挨拶をしたら、

「おっ、おはよ。葉月ちゃんの弟だね？」

ニカツと笑ってカウンターへと歩き、椅子に腰を下ろした。俺は会釈して「はい」と笑みを返した。

「はーちゃんっ！ はーちゃんの弟っ、超イケメン！ 舞花やバいつ！」

姉にしがみ付き、足をバタバタと踏み鳴らして、舞花ちゃんという名の幼女は、顔を真っ赤にしてはしゃいでる…。

「ったく…、イケメン好きはママに似たんだな…」

カウンターに座り、舞花ちゃんにじと目を向けた和俊さんと呼ばれたお客さんに、

「そんなイケメン好きなママが、なんでパパなんかと結婚したのか、舞花には意味わかんないし」

小生意気な口調でそう言って、やれやれというゼスチャーを見せた舞花ちゃんに、

「あのなあ…男はなあ、外見ではなく中身が大事なんだよ」

苦笑いして和俊さんは

「なあ？ 洋二君？」

厨房に入った洋二さんに同意を求めた。

「ええ…、まあ…」

洋二さんはやりわりと笑みを浮かべて、

「蒼ちゃん、お客様に挨拶を」

いつの間にかカウンター向かいから姿を消した蒼に手招きをして呼び寄せた。

（大丈夫か…？）

俺はカウンターにお冷やと紙おしぼりを2つ出して、ちらつと厨房の中を見た。どうやら蒼はドリンク用冷蔵庫の横に身を隠したようだ。

だけど、洋二さんの手招きに応じて、おずおずとだけど、横歩きでカウンター向かいに出てきた。

「おつ、何？ かわいい娘が厨房入ってるじゃん」 和俊さんの声に、身を固めた蒼は、俯いたまま小さな声で「いらっしやいませ…」とつぶやいた。

「すみません、彼女、とても緊張してて」

洋二さんは申し訳なさそうに和俊さんに笑みを向けた。

「あー、気にしないでいいよ。慣れるまでは仕方ない、仕方ない。いや、しかし、こりや毎日アイビーに来る楽しみが増えたなあ」

カラッと明るい声を発して、蒼に笑顔を向けた。

「はーちゃん…、あのこ…もしかして…」

カウンター席、和俊さんの横に座った舞花ちゃんは、姉をじつと

見つめてる。

「うん、充月の彼女だよ」 姉は若干申し訳なさそうに舞花ちゃんに笑みを向けた。

「…むむむっ！ ということは、舞花のライバルってことだね！」

舞花ちゃんは両手を握りしめて、気合いを入れた。
おいおい…勘弁してくれ…。

悩みながら。

「蒼ちゃん、ちょっと手伝ってくれるかな？」

アイスコーヒーとモーニングサービス用のトーストにゆで卵を、カウンターに座る和俊さんと舞花ちゃんに出した後、毎日来店する常連のお客様で、店内は賑やかになりつつあった。

カウンターに向かい少し俯き加減で立ち、お客様のフレンドリーな会話に小さく相槌を打ちながらも、蒼ちゃんの顔には笑みが無い。カウンターに座るお客様は皆ご近所さんで、僕が小さい頃から知ってる人ばかりだし、当たり前のように会話に遠慮はない。

葉月の弟の彼女という蒼ちゃんに皆は、やっぱり興味津々で…。

中々会話が途切れることがなく、それが彼女には相当辛そうに見てとれた。

（少し距離のある厨房内からでもこの状況はやっぱり厳しいみたいだな…）

なんとか相槌を打ち、はい、いいえの受け答えで必死で耐えてるように見える蒼ちゃんの強ばる体や気持ち、少し楽なほうへ切り替えてあげなければ、きっと身も心も1日持たないだろうなと思った。

僕は蒼ちゃんに厨房の中の仕事を振ることにした。

「…何をすればいいですか？」

カウンターに背を向けた蒼ちゃんは、驚くほどはつきりと安堵の顔を僕に見せて、言葉を発した。

（僕のこと、少しは大丈夫になってくれたのかな…）
それとも、僕にすら縋りたくなる程に気持ち一杯一杯だったのか…。

その心情はわからないけど、どうであれ、僕は嬉しさで思わず笑みがこぼれそうになった。

でも今は堪えることにする。蒼ちゃんに対する急激な距離の縮め方は、なるべく避けたほうが良い気がしたからだ。

「ランチ用のミニサラダを器に盛り付けてください」

僕は、浮き上がりそうになる声を押さえて、冷蔵庫から仕込みを終えたサラダの材料を取出して、トレイに並べたガラスの鉢にひとつ見本を作り、蒼ちゃんに残りの器への盛り付けを頼んだ。

「ガラス鉢全部に盛り付け終えたら、ラップをかけて冷蔵庫へお願いします」

僕の指示を受けて、蒼ちゃんは「はい」とひとつ返事をして、サラダの盛り付けに取り掛かる。刹那、ボールに伸ばした彼女の両手を見ると、小刻みに震えていた。

「…大丈夫？」

僕はなるべく負担にならないように、一言だけ声をかけた。そんな僕の言葉にはっとして、蒼ちゃんは、
「平気です！」

両手を下に隠して、少しだけ声を大きく発した後、唇を噛みしめた。

俯き加減のその顔は、悔しそうな色を含んだような苦い顔だった。

「モーニング、アイスコーヒー（ワン）をお願いします！」

フロアから葉月の声と共に伝票が置かれる。

「はい、アイスコーヒーね」

僕はオーダーを受け取り、蒼ちゃんに「じゃあ、サラダは蒼ちゃんに任せたよ」と声をかけた。蒼ちゃんは返事の声の変わりに、ひとつ大きく頷いた。

（…さて、どうしようか…）

蒼ちゃんから離れて、カウンター側でトーストを焼き、モーニングのセットをしながら、

これから迎える忙しいランチタイムを考えて、一通り頭の中でシュミレーションしてみる。

（…いけるだろうか…）

盛り付けの補助と、厨房から料理を葉月と充月君に出す。それから、下がってきた器やグラスを受け取り、補助の合間にそれを洗う。

難しい作業ではないと思うけど、カウンターに向かえば些細ではあれど接客はついて回る。

（…中に引っ込めっぱなしでは、彼女が店を手伝う本来の目的が疎かになってしまっからなあ…）

昨日蒼ちゃんが言った「変わりたい」という言葉と、先刻の悔しそうな顔を思い浮かべた。

(…抗う姿勢が見えるうちは、過剰に保護しないほうがいいか…)

アイスコーヒーを準備した後、トースターから焼けたパンを取出し、プレートに乗せてゆで卵を添えて、トレイに置き、オーダーの品を待っている充月君に差し出し、

「3番テーブルをお願いします」

僕は声をかけた。

「3番テーブル、はいっ！」

充月君は少々強ばる顔でトレイを受け取り、緊張しながら3番テーブルへと歩いた。

(あ…、伝票忘れてる)

カウンターに取り残された3番テーブルのお客様の伝票を見て、僕は小さく笑みを落とした。そんな僕に気付いた葉月は、お帰りになるお客様のレジ作業を終えて食器を下げた後に、

「充月、相当緊張してるわよねえ…」

何やら楽しそうに僕に食器を差し出した。

「初日だからね。仕方ないよ」

僕は葉月に伝票を渡して、

「葉月も初めは似たような感じだったし…、いや、もっとヤバかったかもな」

5年前の葉月を思い出したら、思わず笑いがこみあげた。
「ちよつと！ やだっ！ 何思い出し笑いしてるのよっ！」

葉月は恥ずかしそうに膨れっ面をしながら、僕から伝票をひったくり、充月君のもとへと歩き出した。

やれやれ…、と息をつき、僕は厨房の中央調理台に目を向ける。

「……」

蒼ちゃんはスローペースだが、しかし真剣にサラダの盛り付けをしている。

（賄いを作る時に、少し包丁を握らせてみるのもありかな…）

そう考えてた矢先に、「ようじさいてー。はーちゃんって彼女がいるのに、わかいおんなのこに見とれちゃってさ…」

カウンターから舞花ちゃんの小生意気な声と、刺さるようなじと目が…。

「洋二君、浮気はいかんよ、浮気は…」

舞花ちゃんの隣で便乗して、楽しげに僕を茶化す和俊さんを見て思わず、

「ちよつ…、ち、違いますって」

そう声をあげて苦笑いを浮かべずにはいらなかった。

feel satisfied

「充月、伝票が違うよ。5番テーブルのお客様に先に出さなきゃ」

モーニングを運ぶ俺を呼び止めて、姉は伝票を差し出して少し厳しい声を向けた。

「…ごめん…」

伝票を受け取り、2番テーブルへ向けた足を、360度回転させて、5番テーブルの方向へと進める。

テーブルの隅についてる銀のナンバープレートを確認して、

「お待たせいたしました」　アイスコーヒーとモーニングの皿をギヤルっぽい女性三人組のお客さんに出す。すると、

「ごめん…ストローくれるかな？」

その中の1人が俺を見上げて苦笑いした。

「あつ！　すいませんっ！」

慌ててカウンター横の収納ラックへ戻り、ストローを3つ取出してお客さんの元へと早歩きで向かう。

「すみませんでした。お待たせいたしました」

ストローを差し出すと、不愉快な顔ではなく「ありがとう」と温かい笑みを返されたので、安堵混じりで再度頭を下げて踵を返した。

（確か一番奥のテーブルのお客さんが帰ったような…）

テーブルを片付ける為にそっちに向かうと、そこはもう綺麗に片付けられていて、客を迎える準備は万端だった。

（くそ、早えな…）

カウンターで常連客のちびっこと楽しげに話してる姉を見て、ため息がこぼれた。

初日とはいえど、正直俺はもう少しうまく仕事が出来ると思ってた。

ウェイターって仕事は大して難しくはないなという甘い考えがあったのは否めない。

何故かというと、姉は人なつっこさや明るさはピカイチだが、根は結構鈍臭い人間だってわかってたからだ。そんな鈍臭い人間が何年もこの仕事を続けてるなんて、正直こなす仕事が大して難しくないからなんだろうなと思ってた。

勿論それだけじゃない。洋二さんの存在があつての事ってのは謂うまでもなくだけど。

ちよつと決めつけて姉を、仕事を見下していた自分が情けないなと感じてしまった。

（蒼は、どうだろうか…）

厨房に視線をやると、蒼は洋二さんと何かしらの作業をしていた。

(…楽しそうだな…)

…なんだろう…。

今ちよつとイラつとしたような。

「充月、ちよつと」

カウンターにいる姉が俺を呼ぶ声にはつとして視線を厨房から離して、姉のもとへと向かうと、

「2番テーブルのお客様がもうすぐお帰りになるから、レジよろしくね」

そう告げた矢先に、2番テーブルのお客様が立ち上がり、こちらに歩いてきた。

(…なんでもう帰るってわかるんだ?)

思わず眉間にしわが寄りそうになるのを堪えて、レジに立つと、
「あ、そうだ。コーヒーチケット、もうすぐ無くなるよね? 一冊お願い」

年配のお客様さんは、財布を取出して気さくな笑みを俺に向けた。

「チケット…、あ…、すみません。えっと…」

慣れない指でチケットの金額を打ち、代金を貰い、

「ありがとうございます」
と、頭を下げた。

カウベルが鳴り、お客様がドアの向こうへと消えた時、

「しまった!」

自分がおかした大きな失敗に気付く。

「…チケット買った人の名前がわかんねえ…」

さっきのモーニングの支払いもチケットだし！ ヤバイ！

「姉ちゃん！」

俺は慌ててテーブルを片付けてる姉のもとへ走り、

「さっきのお客さん、チケット買ってっただけど、名前聞いてないんだけど…」

絶対怒られる事を覚悟して、姉に自分の失敗を告げた。

「さっきのお客様は下川さんよ。毎日来るお客様だから、ちゃんと覚えてよ」

姉はにこやかに笑って、

「チケットの下に名前を書いて、チケットボードにかけておいてね。それから、今日の分のチケット、忘れずに伝票にホッチキスで止めておいてよ」

…そうだ、チケットだ。ホッチキスだ。

これ、業務開始から何回姉に言われただろう…。

（…ダメだな…全然役立たずだ）

ちょっとへこんだ…。意気消沈した姿なんて見せたくないけど、歩くと知らず知らず肩が下がる。

「初日なんだから、仕方ないわよ。大丈夫よ、目や体が慣れるまでは中々動けるもんじゃないから」

姉にそう言われて背中をぽんと叩かれた。

「…ごめん。俺…」

「あんたの悪癖だね。昔っから、打たれ弱いくせにやたら気負いが激しいところ」

姉は楽しげに笑って、

「ほんつと嫌なところ似てるわ…」

一言こぼして、

「短時間で全部完璧にできるなんて、思っちゃダメよ」
最初は
出来なくて当たり前なんだからさ」

そう言った後に、

「ていうか、ここでバイトを始めた初日の私より、今の充月のほうが、うんと役に立ってるところがムカつく」

姉は俺に小さく舌を出して苦笑いを浮かべた。

「…どんだけヤバかったんだ…？」

俺も思わず姉に苦笑いを返した。

「…あの洋二が悲鳴をあげそうになるくらい…」

そう告げて、思いだし笑いを始めた。

洋二さんが悲鳴…？

ちよつと何があつたのか、想像つかないけど、余程の事をやらかしたには違いない。

「沢山の失敗があつたからこそ、今の私があるのよ」

そう誇らしげに笑う姉が、ちよつと眩しく見えた。

「がんばれっ！ 女性客に愛されるイケメンウェ이터になる為に」

おーっ と右手を小さくあげて張り切る姉を見て、

「別に愛されたくねーし」

やれやれという笑みがこぼれた。けど、失敗で沈んだ心がいつの間にか浮いてた。

悔しいけど、姉は昔の鈍臭い姉ではなく、いつの間にかしっかり者の姉になってたんだなっってはつきりわかった。

笑顔

「蒼ちゃん、休憩のドリンクお願い」

モーニングタイムが終わり、賑やかだった店内に静寂が戻る午前11時過ぎ。

初日ということもあり、あたふたしながらフロアを右往左往していた充月君は、ちよつと疲れてる感じがした。

蒼ちゃんはというと、お客様が減っていく度にプレッシャーから解放されるのがはつきりと見て取れて、静寂の戻った今はやんわりとだが、笑みまでもを浮かべて中々元気そうだ。

「8分目…？」

グラスにアイスコーヒーを注ぎ入れ、僕にこれでどうかな？ という伺いの視線を向け、返答を待つ。

「お、ちゃんと8分目。よくできました」

笑みを向けると、蒼ちゃんは俯いてにんまりと笑って、小さな声で「よっし」とつぶやき、残り2つのグラスにもアイスコーヒーを注ぎ入れた。

最後に自分用のアイステイーを作り終えると、

「…ドリンク準備できました」

小さく笑って僕に一言告げた。

そんな彼女の笑みを見ると、また距離が少し縮まった感じがして、思わず僕もつられるように小さく笑ってしまった。

そんな僕をちらりと見て、蒼ちゃんは頬をほんのりと赤らめて、

にんまりと笑って俯いた。

（うん、何だかいい感じだな…。でも、数時間でここまで打ち解けるきっかけって、何かあっただろうか…）

厨房の中での数時間をざっと思い返してみただけ、きっかけというきっかけは見当たらなかった。

まあ、しかし、彼女が僕をなるべく警戒せずにリラックスして仕事を手伝ってくれることはとても喜ばしいことだし、このまま少しずつ距離が縮まり、先に繋がるきっかけになればなと願いつつ、見守ることにしようと思った。

「充月君、葉月、ちょっと休憩入れようか」

フロアに向かい声をかけると、葉月は待ってましたと謂わんばかりの笑顔で「はいはい」とスキップしながらカウンターに戻る。

その後ろで（いい歳こいて恥ずかしい…）と言いたげな目と葉月に向けた充月君は、早歩きで葉月を抜かそうとするけど、抜かれまいと、葉月はダッシュするという暴挙に出た。

「ちょ！ 姉ちゃん！ さっき店内は走るなって俺に言っただじゃねーか！」

「それはお客様がいる時に限りだよ」

いち早くカウンターにたどり着き、椅子に腰を下ろして葉月は、にじりと笑った。

「そういう事はちゃんと説明してくれよな…」

不服そうな苦笑いを浮かべて、充月君も椅子に腰を下ろした。

…充月君も緊張から解放されて口数が増えたみたいだ。しかし姉弟のやりとりは中々面白いな。

（二人共性格が良く似てる感じがする）

どちらも負けず嫌いみたいだしね。

姉弟で言い合いするなんて、一人っ子の僕にはちょっと羨ましい光景だったりもする。

「…お、お疲れ様です」

蒼ちゃんは、照れくさそうにカウンターに向かい合わせた葉月にアイスコーヒーを出してつぶやいた。

「ありがと〜う　おおっ！　2回目にしてきれいに8分目っ

蒼ちゃん、中々筋が良いじゃない」

葉月はグラスに注がれたコーヒーの量を見て、蒼ちゃんを褒めた。そんな葉月の言葉に、目を見開き嬉しそうににんまりと笑って「ありがとございます」とつぶやいた後、

「お疲れ様です」

充月君にもアイスコーヒーを差し出した。

「サンキュー。うん…8分目って…やっぱり微妙過ぎてよくわかんねえな…」

グラスを受け取り、充月君は苦笑いを浮かべた。

「…もう北村にはドリンク作ってやらないっ！ 北村はこれから自分でコップに注いだ水でも飲んでろっ！」

蒼ちゃんは口を尖らせて鼻を鳴らした。

「つか水じゃねーよ、お冷やだよ」

充月君も負けじと鼻を鳴らした後、クスクスと楽しげに笑いだした。

「まあ、偉そうに。あんただって、さっきまで水って言ってたくせに」

葉月はぶっとひとつ吹き笑いして充月君にニヤニヤとした笑みを向けた。

「…姉ちゃん、そういうこと言うなよ…」

充月君はばつが悪そうにつぶやき、苦笑いした。

「…オーナー…、お疲れ様です」

蒼ちゃんは照れくさそうに僕にもグラスを差し出した。

（…受け取っても大丈夫だろうか？）

一瞬躊躇したけど、何だか蒼ちゃんは戸惑いなく自然と差し出し、くれた感じがしたから、その流れに従うように受け取ってみることにした。

「…ありがとう」

なるべく手が触れないようにと思ってグラスの上部を掴み受け取り、渴いた喉にアイスコーヒーを流し入れる。

そんな僕をじっと見つめてる瞳は、早朝の力のこもったキツいものではなく、何かを期待してるような、はたまた何かを求めるよう

な瞳に見えた。

…もしかして。

「蒼ちゃん、…お客様のドリンクは、残念だけどまだ早いよ」

僕はグラスを置き、笑みを携え蒼ちゃんにそう告げた。

「…まだですか…」

俯いた顔から落胆の色がはつきりと見えた。そんな蒼ちゃんを見て僕は、

「お客様のドリンクはまだ無理だけど、昼の賄いを作るのを手伝って貰えると助かるんだけど」

僕の言葉に、蒼ちゃんは結構な勢いで顔を上げて、

「賄い！ やります！ やらせてください！」

なんとも嬉しそうな顔を僕に向けた。

「…なあんか、いい感じで仲良くなってるね」

葉月は僕らを見て嬉しそうに笑いながら、

「良かったね、洋二。正直妹ができたみたいで嬉しいでしょ？」

そう言っ、アイスコーヒーを一口飲んだ。

「そうだな…。一人っ子の僕としては妹って結構憧れの存在だからね」

僕は笑みを浮かべて葉月にそう告げた。

「私も兄がないから…」

蒼ちゃんはそうつぶやき、小さく笑みを浮かべた。

「…やっぱり弟より妹なのか…恐るべし、妹パワー」

充月君は口元を小さく歪めて小さく鼻を鳴らした。

「ドンマイ　いいじゃない、充月にはこんなにステキなお姉ちゃんがいるんだからさっ」

葉月は眩しい笑顔を充月君に向けたけど、

「…俺は、もつと優しくしておしとやかな姉が欲しい」　諦め顔で葉月を横目で見て、ため息を落とす充月君に、

「ほおーう…。これで顔拭いて、目を覚まさせてあげようか？」

葉月は、ニツコリと笑って、ダスタークロスを手を取った。

そんな姉弟のやりとりを見て、僕の隣で蒼ちゃんは、クスクスと楽しそうに笑った。

（いい笑顔だな）

僕は横目で蒼ちゃんを見て、ホッと息を落とした。

目的

「充月、ランチA2つ、6番様ね」

「6番、はい！」

伝票にレ点チェックを入れてトレイを2つ持ち、6番テーブルへ歩く。

「Aセット、お待たせいたしました」

向かい合わせて座るカップルに注文の品をだし、そのついでにお客さんが帰ったテーブルの上を片付ける。

自ら考えて率先して動くではなく、司令塔である姉の指示に従って動く。残念ながら、頭は全く回ってない状態だった。

周りを見渡す余裕もなく、慌ただしく過ぎるランチタイムをどうにか乗り切る事で精一杯。厨房にいる蒼の顔も殆ど見ないで、瞬間に時間が過ぎていった。

客が引いたランチタイム終了の午後1時半過ぎ、テーブルを拭いて「疲れた…」と思わず疲労感が口からこぼれた。

そんな俺を見て姉は、

「お疲れ様」 よく頑張ったね」

と、労いの言葉をかけるけど…。

（姉ちゃん、あれだけ動いてよく平気だよな…）

この人、化けモンかよ…。そう思ったら、笑顔が引きつった。

「充月っ　待ちに待ったお昼ごはんだよっ」

姉の声も足取りも凄まじく軽やかだ。つか、飯…あんまり食べる気しねー…。

そんな疲労感丸出しで、無言半笑いの俺を見て、

「何？　嬉しくないの？　お昼ごはん。洋二と蒼ちゃんが作ったごはんだよ！」

「いや…、ほとんど洋二さんが作ったんだろ？」
やれやれと苦笑いする俺に、

「あんた…、ほんつといっぱいっぱいだっただね…」

姉は、お気の毒様と言いたげな視線を俺に投げて、

「ごはん、蒼ちゃんが作ってたんだよ。洋二は隣でアドバイスしてただけ」

この上ないご機嫌な笑みで厨房に視線を流した。

「マジか？」

つられて俺も厨房に視線を向けたら、蒼が洋二さんを見上げて嬉しそうに何か話しかけてた。

「蒼ちゃんて、料理上手だったんだね」

姉は嬉しそうに声を弾ませた。

「…」

俺は返答ができなかった。何故なら、蒼が料理上手だなんて知らなかったからだ。俺が知らない蒼に対して思わず眉間にシワが寄ってしまった。

「…充月、もしかして蒼ちゃんが料理できるって事、知らなかったの？」

俺の表情で姉が察知した。

「…他人の事全て知ってるなんて、あり得ねーし」

図星をさされた苛立ちから、思わず言うつべきじゃない乱雑な言葉が口についてこぼれた。

「他人とか…。何その冷たい言い方…。彼女なのに他人て…」

姉はムツとした表情でつぶやいた。

「いや、あの…、違うんだ」

言葉のあやつていうか、心からそうは思っていないだってこと、そんな気持ちをうまく伝える言葉を探すけど全然見つからない。
…結局口から出たのは情けなくも「ごめん…」の一言だった。

「充月」

嫌でも顔が床に下がる。そんな俺に姉は、

「充月は、なんの為にここに來たの？」

その口調は穏やかだけど、とても強い言葉だった。

「なんの為にここにいるの？」

（なんの為に…）

はつとして顔を上げると、姉は、

「本当の目的、ちゃんと思いつけた？」

ちいさく安堵の息をついて、柔らかな笑みを浮かべた。

「ごめん…。俺…自分の事でいっぱいだった…」

厨房に視線を遣ると、蒼はそわそわとした様子で俺を見つめてた。

「さあ、行こう 彼女の笑顔と、お手製の美味しいごはんが待ってる」

姉はにしつと笑って俺の肩をポンと叩いた。

「姉ちゃん、ありがとう」

つぶやいたら無性に照れ臭くなって、早足でカウンターへと向かった。

昼休み

「お疲れ様です。忙しい中戸惑う事が多くて、かなりきつかったですよ？」

僕はカウンターに歩み寄る充月君に声をかけた。

「お疲れ様です。…すいません、あまり役に立てなくて…。なんか、あれよあれよと言う間に終わった感じです」

充月君は少し落ち込んだ感じでそう答えた。

「その割にはしっかり動けてたよ。初日なのに大したもんだよ、本当に」

「いや…司令塔からの指示を受けて、ただ動いてただけです。実際自分で何やってたんだかよくわかんなかったし…」

充月君は申し訳なさに苦い笑みを浮かべると、

「正直、最初はウエイターなんて運ぶだけの簡単な仕事だろって甘い考え方してました…」

そんな充月君の言葉を聞いて、僕は思わず吹き出しそうになった。

「充月君、初めて葉月が店にバイトに来た時と全く同じこと言うてる」

込み上げる笑いを堪えながら、

「やっぱり姉弟って似てるところが沢山あるんだな」

葉月に視線を向けると、

「私は充月みたいには動けなかったけど…」

小さな苦笑いを浮かべた後、

「そんな事より！ お腹空いた〜っ！ お昼ごはん〜っ！」

盛大に催促の声をあげた。

「…お疲れ様です」

蒼ちゃんは相変わらず照れくさそうに、グリーンのプレート銘々に差し出した。

「うわっ 美味しそうっ」

両手を合わせて歓声をあげる葉月。その隣で目を丸くして驚きの表情でプレートを見つめる充月君。

そんな二人に、

「和風ツナスパゲッティです…」

蒼ちゃんはへへっとはにかみ、そう告げた。

「すげーな…。これ…マジでお前が作ったの？」

半ば茫然とした顔で、充月君は蒼ちゃんを見つめた。

「麺類は普段あまり作らないから、とても楽しかった」

蒼ちゃんは充月君の隣に自分の分のプレートを置き、厨房から力ウンターへと移動した。

僕はいつものように倉庫から四脚の丸イスを運び、厨房の中、力ウンター側の調理台をテーブルで昼食を摂る事にした。

「さっ 出来たてのうちに食べようっ！」

葉月は「いっただっきま〜す」と声を弾ませて両手をパチンと合わせて、フォークを手にした。

「い、いただきます…」

充月君は何だか緊張気味な声を発してフォークを手に、プレートのパスタを凝視してる。

「…いただきます」

そうつぶやきつつ、充月君の隣で、二人が食べる様子を不安そうに伺う蒼ちゃん。そんな三種三様の表情を見て、僕は笑いを堪えながら手を合わせて「いただきます」とつぶやいた。

充月君はフォークでパスタを絡め取り、恐る恐る口に運んだ。もぐもぐと数度咀嚼を重ねるうちに、目が驚き輝いていくのがはっきり見て取れた。

「…マジうまい…。すげーうまい…」

蒼ちゃんに顔を向けて、

「本当、びっくりする位うまいんだけど！　これ、本当に前が作ったのか!？」

驚きに加えて、笑顔で顔を綻ばせながら蒼ちゃんに尋ねた。

「作り方はオーナーに教えて貰ったけど、全部ひとりで作ったぞ」

蒼ちゃんは、どうだ！　と謂わんばかりの顔で、ふふんと笑った。

「すっごく美味しい　これ、洋二が作るツナスパより美味しいかも！」

葉月は感激の声をあげてどんどんパスタを口に運んでいる。

「蒼ちゃん、本当に手際が良くて僕が手伝う事なんて全くなかった

よ。さすが毎日夕飯作ってるだけあるよね」

蒼ちゃんに笑顔を向けて「うん、本当に美味しくできてるよ」とパスタを口へと運んだ。

「すごいっ！ 蒼ちゃんの歳で毎日夕飯作ってるなんて！ 私なんて17歳の頃はチャーハンとか焼きそばとか目玉焼き位しか作れなかったわよ…」

「しかも、毎回黄身の潰れたシヨボイ目玉焼きな…」

充月君は、ぷっ…と吹き笑いしてつぶやいた。そんな充月君を葉月は横目でジロリと睨む。

「家に帰ったら…、料理を作ること位しかやる事がなくて…」

蒼ちゃんは、苦みを含んだ笑みでつぶやいた。

「…誰かに食べて貰って、喜んで貰うって、こんなに嬉しい事だったんだって…」

蒼ちゃんは俯き加減で小さく鼻をすすり、パスタを口へ運んだ。

「蒼ちゃん…」

葉月は、せわしく動かしていたフォークを握る手を止めて、

「これからはここに来る日は、蒼ちゃんが作った賄いを食べさせてよ」

優しい笑顔で蒼ちゃんに語り掛けた。

「僕も是非そうして欲しいなと思った。蒼ちゃんが負担にならない

程度でいいから、どうだろう?。」

それが彼女の自信に繋がれば、いうことはないと僕は思った。
勿論それだけではなく、彼女が想像以上にできる子だと思える何かを感じたっていうのもある。

これは僕の想像でしかないけど、今蒼ちゃんは『与えることで受け取れる喜び』の尻尾に触れたなと思った。

それは、心を込めて作り、提供し、それを受け取る方達の笑顔という幸せを得る事を楚とする、僕の仕事にはとても大切な感情だ。
勿論楚を強固にする技術も必要不可欠だ。そこも惜しみなく彼女に与えてあげたいなと思ってる。

是非ともこの道に進んで欲しいという願いとまではいかないけど、これから進むであろう人生の選択肢の幅がひとつでも増えたらいいなと願ってる。

蒼ちゃんは、フォークを置き、

「賄い…毎日作りたいです。誰かに美味しいって喜んで貰える料理を少しでも沢山作りたい…」

蒼ちゃんは、薄茶色の瞳を真っ直ぐ僕に向けた。

その瞳は、恐怖を無理して堪え、挑み刺す瞳ではなく、目標に向けて目指し挑む前向きな瞳だと僕は感じた。

「よし、じゃあ、これからがんばりましょう。よろしく願いします」

そう言葉を渡すと、安堵と嬉しさが胸に入り混じり、思わず顔

が綻んでしまった。

「良かったじゃない？ 毎日彼女が作るご飯が食べられるなんてそんな幸せ、滅多にないわよね」

葉月は充月君を見て、ニヤニヤとした笑みを向けた。

「ね…姉ちゃんだって！ 毎日洋二さんの作る料理食べてんだろーが…」

葉月のニヤニヤに耐えきれないと謂わんばかりに赤面して、充月君は鼻をひとつ鳴らした。

「そうよ 私に幸せ者よ」
「どーだ、参ったか」
葉月は、ははは〜んと笑ってパスタを頬ばった。

「…つかさ、その幸せ者とやらが、北村さんから津山さんに転身する日が来るんだか…今世紀最大の謎だな…」

充月君はやれやれとため息をついた。

「ちよつと…それ、どーゆー意味よお…」
葉月はムツとして充月君を覗きこんだ。

「別に深い意味はない。ただ…」
充月君は一呼吸置いた後に、

「母さんが、苗字が変わる前に、孫ができました」
「はならないかと心配してるって事だけは言っとく」
なんて事に

充月君は僕を見て、ふふ〜んと笑った。

「ちよつ…やだっ！ ママ！ 充月にそんな事言ってるの!?!」

「いや、俺にだけでなくね、時々親父ともそんな話して盛り上がったりしてるよ」

「っ…！」

僕は思わずパスタを吹き出しそうになった。

「いつ、いやいやいや！ ま、孫って！ あの！ そんなっ！」

「え？ だって、半年も同棲してんだから…あり得ない事じゃないと思うんですが…」

充月君は苦笑い気味で僕にそう言った。

「ま、まあ…、確かにあり得くはないわね…」

葉月はプレートの上でフォークを忙しくまわしながら、照れくさそうにつぶやいた。

「えー…と…」

恥ずかしさが先に立ち、言葉がうまく繋がらない僕を見て、

「…オーナー…真っ赤…」 蒼ちゃんはつぶやき俯いて、肩を震わせ笑いを堪える。

そんな蒼ちゃんを見て、北村姉弟は思わず顔を見合せて楽しげに笑いだした。

回想2

この店の手伝いをさせてもらうことを思いつき、そこに向かって行動を起こせたのは間違いじゃなかったと思った。

誤魔化しの仮面を被ることなく、感情を押し殺して能面になることもなく、蒼の中から本当に自然な感情が伺える。

初日から順調過ぎるくらいだなと思うところは少々あれど、やっぱりあいつのいろんな顔を見てると、俺はすげー嬉しいわけで。

厨房の右奥で姉は鼻歌混じりで食洗機の中の洗い物を片付けてる。歌ってるのは店内のBGM。姉がこよなく愛していると豪語するロックグループのラブソングだ。

厨房の中央奥では洋二さんと蒼がティータイム用のシフォンケーキを作る支度をしてる。

真剣に、でもわくわくとした空気を醸し出しながら、洋二さんの話を聞いて作業を見つめてる蒼を見てると、数日前の冷たくて虚ろな蒼の姿がまるで嘘みたいにも思えてくる。

(…もう、あんな顔させたくないな…)

そう願うと同時に、心の中に何かが静かに沸き立つ感じがした。

少し時間を巻き戻して、夏休みが始まる数日前のことだ。期末テストを終え、休みまであともうひと踏張りというところで、

蒼はぱったりと学校に来なくなった。

蒼が休んだ初日、俺はいつも登校時に待ち合わせる歩道橋の下で蒼の到着を待った。だけど、一向に来る気配がなく、ただ時間だけが過ぎていった。

勿論心配になり、蒼の携帯を鳴らしたら『風邪をひいた。休む』と体調不良を訴えた。

昨日までは何となく元気にも見えたのに…。そんな違和感はあるんだけど、俺はゆっくり休むようにと告げて電話を切り、学校へと自転車走らせた。

授業を終え学校帰りに様子はどうかと思い携帯に電話をしても、蒼は電話に出なかった。メールを飛ばしても返信がなくな…。

その日を境に全くの音信不通状態になってしまった。

登校する朝と、下校した夕刻に蒼の家に行き、威圧感のある大きな門に備え付けられた呼び鈴を鳴らしたけど、まるで住人がいる気配がない全くの無反応で。

日を追う毎に不安だけが募っていく俺の気持ちと反して、その大きな扉は一向に開くことがなく、そして俺にはその扉を蹴り破る勇氣も当然なくて…。

無言の門前払いを食らって4日。正直俺は諦める心に負けそうだった。

こうしていくら俺が蒼を思っても考えても、結局は気持ちがちやんと繋がるなんてことはなく、一方通行のままなんだと感じてしまったんだ。

1年のときは互いに隣のクラスで、蒼と初めて言葉を交わしたあの歩道橋の上の出来事から始まった俺達。

それから登下校中や休み時間に交わす僅かな言葉を積み重ね、半年を経て2年になり、同じクラスになって…。

その間に少し、また少しと縮んできたと思われた互いの距離は、その中で時折見せる蒼の小さな笑みは、偽りのものじゃないと願いたいけど、これだけ毎日あからさまに拒否されると、そんな願いも自信もぐらぐらと揺らいでしまっていた。

「結局…俺なんかじゃダメってことか…」

呟いたら、梅雨時のじめじめとした不快な暑さと反して、体から熱がどんどん奪われるような感覚になり、門を見つめていた視線がアスファルトへと下がった。

「もう無理だな…」

ため息と同時に諦めのどん詰まりである言葉がアスファルトに落ちた。

開くことのない重い扉に背をむけ、自転車のスタンドを乱雑に足で払いのけて自転車にまたがったら、「ふざけんな…」どうしようもなく苛々した。

自転車にまたがったまま、ポケットから携帯を取出して蒼にメールを飛ばした。

内容は

『いつもの歩道橋で待ってる　お前が来るまでな!』
とだけ打ち込み飛ばした。

空を見上げたら、どんよりと厚い雲。

まだ梅雨の明けない、予測不能の不安定な空模様。

どうしても折れそうな自分の気持ちに負けたくなかったんだ。

諦めのどん詰まりなんてふざけんな！

どん詰まりなんてないんだ。あいつはまだちゃんと息して生きてんだ。

『死ぬ気があったらもつと早くにあの世に逝ってる』

あの日、蒼が俺に告げた言葉を思い出した。

『何も知らないくせに。知ったかぶりして近づいてくる偽善者なんて大嫌い！』

あの時蒼は、自分を取り巻く全てを拒絶、排除する事で辛うじて生きてた。

蒼が見せた真剣な瞳は、『この先もずっと続くだろう私の孤独を何も知らないあんたになんか救えるわけがない』

そんな事を訴えるような瞳だっと思ったんだ。

俺はそんな瞳を向けた蒼に、

「偽善つてのは、人の為に善を尽くすってことだと思ってる。よし決めた！」

俺は蒼を見下ろして、ひと呼吸置き、

「お前が俺を知らない奴とかウザいとか思ったって、お前とこの先もずっと係わりを持つって、たった今決めたぞ！」

それは決して一時差し伸べる同情の手などではなくだ。
そんな俺の言葉に蒼は、焦げ茶色の大きな瞳を更に大きく見開き、
声無く俺を見上げた。

「だつて、お前…」

今まで、進藤蒼をずっと気にして目で追ってたのに。
見て見ぬ振りしてアクションを起こす事を諦め、言い様のない苛立ちを押し殺し過ごしてた。

そんな俺が偶然にも事を起こし、ずっと続けたって決定付けたのは、

「すげー泣いてんじゃん…。そんな顔してる奴、ほっとけるかつつーの…」

あの時蒼の泣き顔を見て、わかつたんだ。
なんで俺がいつも学校で苛立ちながらも蒼を目で追ってたのか…。

蒼の全てを救いたいなんて、大それた事はできないけど。
ほんの少しでもいい。
泣いたり笑ったり。

空っぽな蒼ではなく、そんな感情を出して『生きてる』蒼が見たい。

そう思ってたんだ。

「あの時と気持ちは変わってないんだろ？」

俺は携帯を見つめて自分に問いかけた。

勿論答えは「YES」だった。

「充月くっ！ 彼女に見惚れてないで、ちゃんとテーブル拭きなさいよっ！」

いつの間にか厨房からフロアに移動してきた姉が、笑いながら俺の背中をぺしゃりと叩いた。

「みつ、見惚れてねーしっ！」

不意打ちをくらい、慌ててしまった俺を見て厨房の洋二さんは小さく吹き出した。その隣で俺を指差して「また怒られてる」と言いたげに小さくニヤニヤしてる蒼。

…お前…、絶対後で覚えてやがれ…。
引きつり笑いを蒼に向けたけど、

（あの時、雨が降ろうが槍が降ろうがって気持ちで蒼を待ってて良かったな…）

心の中で呟いたら、足取りが軽やかにならずにはいらなかった。

それが僕等だ

「いいにおい…」

シフォンケーキを焼くオーブンの傍で、蒼ちゃんが感嘆混じりでつぶやいた。

仕事も半日を終えて、だいぶ緊張が解けたのか、その表情はともナチュラルな感じに見える。

「焼けたら味見してみる？」

蒼ちゃんに視線を向けると、頬を緩ませてすっかりとひとつ頷いた。

厨房の中、時折すれ違いざまに僕の腕と彼女の肩が触れたりしたけど、心配したようなパニックには繋がらずにしっかりと業務をこなす姿を見て、僕はそのまま順調にいけばいいなと小さく安堵した。

そんな順調そうな蒼ちゃんとは反して、シフォンケーキが焼ける時間が迫りつつあると共に、徐々に表情が強ばっていく葉月が気になった。

シフォンケーキが焼けるという事は、言わずと知れた彼　はじめ君が来店するという事に繋がるわけで…。

（やれやれ…）

僕は床に小さく息をひとつこぼした後「蒼ちゃん、ちょっとごめん。5～6分厨房から離れるね」と声をかけた。

蒼ちゃんは「はい」とひとつ返事をして、少し表情を引き締めた。

「大丈夫だよ、ちょっとフロアに行くだけだからね」

蒼ちゃんがひとり不安にならないようにと言葉を足すと、僕に小さく笑みを向けてひとつしつかりと頷いてくれた。

厨房から少し歩き、フロアの入り口。右隣のテーブル席の出窓に並んだ小さな硝子鉢のポトスを見つめて、葉月は険しい表情を浮かべている。

フロアに充月君の姿がない。しかし化粧室から物音がするということは、ティータイムが始まる前に、トイレ掃除に向かったんだなと理解できた。

「葉月、看板娘がそんな顔してたらお客様の居心地が悪くなるから」

僕は葉月の肩に手を乗せて一言、なるべく蒼ちゃんに届かないように声をかけた。

「…わかってるよ…わかってる…」

葉月は僕を見ることなくつぶやいて、深く息を吸い込み、ゆっくりと吐いて深呼吸をした。

「わかってるんだけど…」

軽く握られた右手を口元へ添えて、少し視線を上げて窓の外を見つめた。

「…はじめ君が来る時間だけ、二人に休憩って名目で散歩に出掛けて貰うって…ダメかな…？」

どうやら葉月は充月君達とはじめ君を会わせないようにすることを考えてるようだ。

だけどそれは…。

「それをここにくる毎日、彼らにさせるのか？」

僕は葉月に問いかけた。

「だって…」

「それは、彼女にとって良い事なんだろうか…。何か良からぬ事が起こるんじゃないかって憶測だけではじめ君と敢えて距離を取ることは、僕は正直賛成できないよ」

加えて過度な防衛意識は、時として悪い方向へと作用するということを葉月に諭すと、

「でも…もし…」

葉月は不安げな表情で振り返って僕を見上げて言葉を詰まらせた。

「もしもの時は、僕がいるから。頼りないかもしれないけど、守りたい人くらいはちゃんと守る気持ちでいるよ」

何となく浮かんでしまった苦笑いを見て、葉月は、

「ごめん…。私、また…」 1人で気負い過ぎてると言いたげな苦しげな顔を見せた。

「お願い、洋二…。私、せっかく見れた蒼ちゃんの笑顔を消したくない。だから一緒に…」

弱気な瞳で僕を見上げて、微かに唇を震わせる葉月を見ると、やれやれ…とため息混じりの笑みが落ちた。

葉月は本当に感情が豊かで真っ直ぐな女だ。^{ひと} だけど、時々ネガテ

イブに走って收拾がつかなくなることがある。

それはいつだって、自分の為ではなく、誰かを想ってのことばかりで。

でも僕はそんな葉月の優しいお節介が好きだったりもして。

「大丈夫だよ。僕を信じて。僕もちゃんと葉月を信じてる」

僕は葉月の両肩に手を乗せて、精一杯の笑顔で一言告げた。

『僕に全て任せろ』なんて決まて言うつもりはないし、僕には1人で何もかもを万全に背負う力はまだない。

何より葉月の考えや事運びを否定なんて僕にはできないし、互いの主張を誇示してぶつかり合うなんて性格上無理だってわかってる。

だから、1人ではなく2人で。

互いに信じあい進みゆく僕等でいたいから。

勿論、ここぞという時は全力で大事なものを守るって気持ちは楚としてあることは言うまでもない。

「1人で頑張るな。ちゃんと傍に僕がいる」

普段は中々真っ直ぐに視線を合わせることもなんてできない僕だけど、本当に伝えたい気持ち、伝えたい想いを届けたい時にだけ。

僕は葉月と瞳を合わせて小さく笑みを向けた。

「洋二……」

葉月は目を見開き、一言しっかりと「うん、信じてる」と言葉と笑顔を返してくれた。

「…二人きりなら…、この流れで遠慮なくギュッてできるのに…」
口を尖らせてつぶやく葉月を見て、僕は思わず照れ笑いしてしまった。
った。

「よし…家に帰ったら、思い切り甘えてやるんだからあ…」
葉月はにじりと笑って、

「よし、頑張ろっ」
と気合いを入れた。

「…すみません。お手柔らかにお願いします」
何となく謝ってしまった僕の後ろで、

「はい、イチャイチャタイム終了了」

掃除を終えた充月君がクスクスと笑って声を上げた。

「…チッ、お邪魔虫がきた」

葉月は憎らしそうに、しかし笑みを携えて充月君を見たけど、僕は赤面混じりの苦笑い…そして無言で厨房へと早足で戻った。

フロアからケラケラと姉弟の笑い声が響く。

「…」
「…」

ふと蒼ちゃんと視線が合った。

蒼ちゃんは口角の片側を小さく上げて「ふっ…」となま暖かい笑みを向け、

「全く…イチャイチャと…」
とつぶやいた。

「……すみません……」

何だろう……。ついつい謝ってしまった僕だった。

ティータイムとあの人

「洋二さんてびっくりするくらいシャイな人だよな」

俺は照れくさそうに、そそくさと厨房へ戻った洋二さんを見て、思わず吹き出してしまった。

「そこが洋二の良いところなのっ！」

言いつつも腹を抱えてケラケラと…姉ちゃん…笑いすぎだろ。

「つーか、2人で何コソコソ喋ってたんだよ」

からかい半分の視線を姉に送って、尋ねると、

「今夜一緒にお風呂に入ろうねっ　て話よ」

ハハハ　と浮かれた声を放ち、流し目を返された。

「バ…バカじゃね…」

言いつつ、ちよつと生々しい想像をしてしまった俺に、

「…今、一瞬想像したでしょ」

ニヤニヤとした笑みを向けて「今夜のオカズにしないでよね…」
とつぶやかれた。

「だ、誰が　っ！」

身内なんかオカズになんかするか…！

言いかけたら、カウベルが店内に鳴り響いた。慌てて会話を止めて、

「いらっしやいませー」

入り口に視線を向けると、

「よ、こんにちは」

と、ひよる長くて、黒髪…。今朝の男の人だ。確か…、

「あらはじめくんいらっしやい」

姉はまるで切って張り付けたような営業スマイルをかざして、はじめさんを迎えた。

「やあ葉月ちゃん 今日はいっになく素敵な営業スマイルだね」

姉のあからさまな営業スマイルをからかうように、はじめさんは息を詰めるようにくくと笑い、

「いつものよろしく」 あ、ドリンクはアイスコーヒーで姉の肩をひとつ叩き、カウンターへと歩いて行った。

「……」

姉は少し俯き加減で、無言で口の片端をひくつかせ、…若干震ってるような。

「ね、姉ちゃん…?」

俺は恐る恐る姉を呼んでみた。

「…充月、カウンターのお客様にシフォンケーキアイスコーヒーセツト」

地を這うような低い声と共に、…すげー睨まれた。

（ちよ、なんでこんなに怒ってんだ???）

そう思いつつも、触らぬ姉にんとやら。俺ははじめさんに出す

おしぼりとお冷やをトレイに乗せて、

「洋二さん、シフォン、アイスコーヒーセットお願いしますー!」

オーダーと伝票を厨房に通した。

「どうぞ」

おしぼりとお冷やをはじめさんに出したけど、何となく俺までぎこちない笑顔になってしまった。

「ありがとう、充月くんだったっけか?」

ニカツと笑って俺を見るはじめさんに、ひとつ小さく頷いた。

(この人、一体何者なんだ…)

ぱつと見、全く悪そうな人には見えないけど…。

姉はどうもこの人が好きじゃなさそうだって感じがするし。

「はじめくん、いらつしゃい」

洋二さんは朝の事は何事もなかったかのように、厨房から小さな笑みを浮かべてアイスコーヒーを差し出した。

「…で、充月くんの彼女って、どこ?」

アイスコーヒーを受け取り、紙袋からストローを出して、俺に尋ねてきた。

「……」

厨房に目を遣ると、そこに蒼の姿はなく…。

「蒼ちゃん……」

洋二さんは、モーニングの時と同じように冷蔵庫の辺りを見つめ

て手招きをした。

（やっぱ…隠れたか…）

大丈夫だろうか…。はじめさんは洋二さんと歳がかなり近い感じがする。

今朝あった、ちびギャルの父である和俊さんとはまた違う大人の男に、蒼はきつとかなり戸惑ってるんじゃないかと思い、嫌でも不安が沸いてくる。

「…い、い……ま…せ…」

冷蔵庫から少しだけ顔を覗かせて、蒼は、聞き取り困難な蚊の鳴くような声を発した。

「…すみません、はじめくん、今日のところはこれで…」

勘弁くださいと、洋二さんは苦笑いして、

「蒼ちゃん、シフォンケーキの盛り付けを手伝ってください」

はじめさんに背を向けさせる位置に蒼を立たせて、共に厨房の仕事にとりかかった。

「あー、お構い無く」 いや、いいね、うん。中々可愛らしい娘じゃん」

はじめさんは涼しげな笑みを浮かべて、俺に視線を流した。

「ねえ、キミら付き合ってどんくらいなの？」

はじめさんは、興味津々と謂わんばかりの表情で俺に問いかけた。

「…3ヶ月…くらいです」

あまり詳しく突っ込まれたくないけど、とりあえず、世間話程度

の範囲で短く答えた。

「敬遠しなくていいよ。俺、彼女…蒼ちゃんだっけ？　の事、大体わかってるしさ」

はじめさんは俺に小さな声で囁いた。その言葉に俺はギョツとして目を見開いた。

「し、知ってる…って…」

動転して思わず言葉が出にくくなる俺に、

「簡単な説明だけど、オーナー達に事情聞いてるってこと」

はじめさんは、悪びれることなくそう告げて、アイスコーヒーを飲んだ。

「そ…そうでした…か」

（…あの事件の事、知ってるんじゃないのか…）
安堵の息を隠しつつ、すみませんと小さく頭を下げた。

（そっか…洋二さん、前もって蒼の事をそれとなく常連さん達に…）

だから、カウンターに座るお客さんが口々に「気にしないで」とか、「気を遣わないで」とか声をかけてくれたんだ…。

蒼の心になるべく負担がかからないように。そんな配慮をしてくれてた事を知って、俺は感謝の気持ちに包まれた。

「シフォンケーキ、お待たせいたしました」

洋二さんは、はじめさんにプレートを差し出した。

「ありがとう、ねえ、大丈夫だからさ、隠れてないで、ちょっと出ておいでよ」

はじめさんは食洗機の辺りに身を潜めている蒼に、気さくに声をかけた。

「……」

蒼は俯き加減で眉間にしわを寄せ、無言ながらも、少し、また少しとカウンターへと蟹歩きをして姿を現した。

何となく嫌いになれない人

はじめ君が何となく嫌いになれないのは、同志的な何かを感じたからかも知れない。

口数が少なく、笑むことでどことなく身をかわしながらコミュニケーションを取ろうとする僕と対極して、はじめ君はフランクで会話のキャパも広い。

一見したら広く浅く軽い人とも取れがちだけど、実は考察、洞察力共にかなり鋭かったりする。

それはきつとはじめ君が進みたいと思い歩いてきた、歩き続けている道から得た彼自身が鍛え上げてきた、或いは鍛え続けている武器であり防具でもあるのだらうと、時々そう思ったりする。

彼との出会いは2年前の7月半ばだった。

真水の匂いを含むしっとりとした弱い風。天候不順の薄曇りの空を映し出す少し重い波を背にして、防波堤に胡坐をかいて、はじめ君はこのアイビーを見つめていた。

かいた胡坐の上にはスケッチブック。右手には鉛筆。店や辺りを見渡してはスケッチブックに視線を落として黙々と鉛筆を動かしていた。

初めて見る顔だと思ったけど、ここは様々な人が予告なく訪れる観光町だから、ここで働く僕にとっては当たり前前に普通の出来事で、別段違和感はなかった。

絵描きのたまごか、趣味の人かな…。

きつとはじめ君を見ての第一印象はその程度だったと思う。

裏口から店内に入り、開店の準備を始めようと、僕は店の入り口の鍵を開けてドアを開け放った。

開けたドアの道路を挟んだ正面には、はじめ君がいて、カウベルの音に釣られるように走らせる鉛筆を止めて僕に視線を向けた。

「うっわ！ オーナー本当に若い！ 女将さんが言ってた事って、てつきりジョークじゃないかなと思ってたんだけど！」

はじめ君は僕を見て、悪びれることなくそう叫んだ。

僕はそんなはじめ君を見て、波音の女将である千鶴さんにされていた前ふりを思い出した。

『近々ウチに期間限定住み込みのバイトさんが来るから、洋二君、よろしくね』

（なるほど、彼が波音で働くことになった藤原さんか…確か僕よりひとつ年上だっけ…）

そう思い、小さな笑みをひとつ向けて軽く会釈した僕を見て、はじめ君はかいた胡坐をやめて、堤防から降りてこちらに小走りに近寄ってきた。

（…やけに曇り空の似合う人だな…）

はじめ君を間近で見て結構はつきりとそう感じた。なんて言うんだろう。雨に濡れた柳の木のような…そんなイメージの人だなと。

「ねえ、オーナーって歳幾つ？」

長い前髪から少し覗かせた、やや細めの瞳を弓のようにしならせ

るような笑みを浮かべて、はじめ君は僕に尋ねた。

「もうじき二十歳になります。貴方は…波音のアルバイトさんですよね？」

返答と共に、僕は小さな笑みと質問を返した。そんな僕の問いに、はじめ君は目を見開いて、

「へー、よくわかったね。そうだよ、今日から8月末まであそこでお世話になる、藤原はじめです。よろしく」

にかつと笑って波音を指差し、そう自己紹介した後に、

「オーナーってさ、なんか見た目ちよつと作り物みたいだな」

本当に悪びれることなく、笑顔と共に一言、さらりと僕に言い放った。

僕は少々の苛立ちを押し込めて苦笑いを浮かべ、

「…どういう意味ですか？」

（初対面なのに、随分と失礼な奴だな）

そう思ったけど、揉め事を嫌う僕はなるべく冷静にと口調を穏やかに保つ。

「空気はいい人っぽいけど、秘めたるはなんとやらってね」

挑発的な笑みを携え、酷く曖昧で自己完結な言葉を投げられた僕は、勿論返答に困った。

「笑って回避する奴って、どっか裏で歪みが生じたりするでしょ？」

そういう軌道修正って結構大変じゃない？」

「……」

なんなんだコイツ。まるで人の心を覗くような事を…。

図星に近いはじめ君の言葉に、僕は思わず無言で眉間にしわを寄せた。

「だけど不思議だよな」

はじめ君は視線を僕から少し上に向けて、

「この店から、すげー良い空気を感じるんだ。なんつーかさ、こっつ、包まれるようなね…」

はじめ君は、ふっと表情を緩めて、まるで店を慈しむかのような笑みを浮かべた。

「スケッチしてるとき、そこに宿る何かを時々感じたりすることがあるんだ。この店からは、穏やかさと温かさを感じる」

恥ずかしげもなく、はじめ君はそうはつきりと僕に告げた。

「今は貼りぼてみたいな作り物の匂いのする君が、本当のオーナーになる時が来たら、この店はどんな姿になるんだろうな」

はじめ君は「楽しみだな」と僕に真っ直ぐな瞳を向けてにっこりと笑った。

そんなはじめ君を見て、僕は戸惑う事を抑えて「はあ……」とつぶやき、やんわりと笑う事しかできなかった。

今思えば、はじめ君に見抜かれてたんだなと……。店を継ぐつ

て自ら望んだ事なのに、こんな歳で店を切り盛りしなくては……いや、やらされてると、どこかストレスを感じていながらも、笑みを浮かべなければいけない日々を感じてた行き場のないフラストレーションを。

誰の期待に応えるのか。そんな事はかりが先行してたりもした。本当に頼りなく情けない自分を隠す為に演じる、作ったような情けない自分の姿が以前の僕にはあったし、今だってそんな自分がいる。

だけど、あの頃と違うのは、あの頃より確実に作り笑いが減ったという事だ。

端から見たら酷くきこえない、不器用な笑みかもしれない。時々バカみたいにテンパリ、言葉がでない時もある。

だけど、あの頃より僕の感情は生きていると感じてる。そう思うようになったのは、いつだって変わらない笑顔の葉月がいたからだ。

守っているつもりが実はま守られていた。そんな自分の弱さを認めたら、霧がかかった視界が晴れていくのを感じたんだ。

相変わらず僕は口数が少ないけど、考える視野も、出す言葉も、笑みを浮かべるコミュニケーションも、あの頃とは全然違うと感じてる。

今朝、はじめ君に

『オーナーってやっぱり嫌いだわ』

そう言われて、どこか嬉しかったのは、きっと作り物みたいな僕が、中身を持つ人として動き出したことを彼が察知して、思わず漏

れた本音だろうなと思ったからだ。

種は違えど、僕もはじめ君も『作り続けて進んでいく者同志』だから、明確な言葉を交わさなくても、互いにどこかわかりあうことができる部分がある事は決して否めない。

だから、僕は、はじめ君が何となく嫌いになれない。

「…どしたの？　ブーツとして。俺を見つめて卑猥な妄想してた？」
はじめ君は僕に視線を向けて、いつも通り肩を揺すり、息を詰めるように笑いだした。

「そんなわけないでしょ！」

思わず声を荒げて全力で否定したら、

「ムキになるところが怪しいな…」

はじめ君はますます笑う始末。

「え…、何？…もしかしてそういう三角関係なの…？」

フロアで充月君が葉月に問いかける声が耳に届いた。

「違うよっ！！」

「違うわよっ！！」

葉月と声を重ねて再度全力で否定した。

「本っ当、からかい甲斐あって面白いよね？　この人達」
はじめ君は、ケラケラ笑って蒼ちゃんに尋ねた。

「……はい」

俯いてひとつ返答する蒼ちゃんの肩も、ふるふると揺れていた。

「よし、笑った」

はじめ君は蒼ちゃんを見て、にかつと笑ってアイスコーヒを飲んだ。

初日終わり

なだらかに時間が過ぎていくようなティータイムが終わり、閉店の時間が訪れた。

姉と俺はフロアの掃除。 洋二さんと蒼は厨房内の片付け。 それぞれの持ち場の作業を済ませて、俺達の手伝い初日が洋二さんのお疲れ様でした」という声かけで終わりを告げた。

4人でドリンクを交えての軽い談笑の後、

「明日もよろしく願います。今日は初日で疲れただろうから、ゆっくり休んでください」

洋二さんは俺達に笑みを向けて労いの言葉をくれた。

「お疲れ様でした」

「お疲れ様でした」

蒼と声を重ねて、頭を下げると姉は、

「明日は1時間早くじゃなくて、10分前でね」

思い出し笑いをしながら俺を裏口まで見送って、

「お疲れ様」 気をつけて帰ってね」

自転車にまたがり走りだした俺達に手を振った。

とても夕方なんて思えない、眩しい青空から照りつける容赦ない日射し。

初めてのことに尽くしでの疲労感、そして冷房の効いた店内に1日中いたこともあり、その暑さを何倍にも感じる。ペダルをこぐ足がダルくて思わず苦笑いしてしまう。

隣で自転車をこぐ蒼もどうやら俺と同じ　いや、蒼のほうがきつと俺よりも数段疲れてるだろう。

外気の暑さと反して、顔色が少し悪そうだ。

「大丈夫か？　少し休むか？」

俺は自転車を停めて、少し遅れて自転車を走らせる蒼を見た。

「……」

無言でブレーキを握り、自転車を停めた蒼は、苦笑を混ぜた顔で深いため息をひとつ地面に落として、

「疲れた……」

ぼつりとつぶやいてスタンドを立てた。俺もスタンドを立てて、疲労感丸出しの蒼に歩み寄り、

「初日からちよつと頑張り過ぎてないか？」

蒼の頭を軽く叩きたくなつたけど、それはやめて、少し撫でた。

「私はがんばるって決めたら、目一杯がんばる性格なんだよ」

蒼は俯いたままだけど、微かに揺れた肩で笑ってるってわかった。

「知らなかったのか？　私がそういうタイプの人間だって」

俺を見上げて、まるでイタズラしたような笑みを浮かべる蒼に、

「……知ってる。やりたいことに対しては無茶しやがる。融通がきかない不器用なタイプだってな」

加えて我が強いし、我慢強い。そう思ってるけど、それは言わないでおこう。

「それから、料理がうまい。これは新しい驚愕の発見だった」
海側へ体を向けて堤防に腰を下ろす蒼にそう告げた。

「驚愕…。失礼な…」

蒼は海を見つめ、口を尖らせてそうつぶやいたけど、

「料理…好きなこと言えなくて…」ごめん」

その顔は、苦いんだか照れくさいのか。判断つけがたいものだった。

「別に謝ることは」

「だって、北村怒ってた」

俺の言葉を遮って、蒼ははっきりとそう言い放った。

「いや…怒ってな」

「嘘だ。怒ってた」

言葉と共に向けられた、真っ直ぐで真剣な焦げ茶色の瞳は、俺に言い訳を考える隙間も誤魔化す隙も与えてくれない。

「…スマン…。俺が知らないお前を突然知って、ちょっとだけイラつとした…」

外気の暑さではない熱が底から登ってくる。

「…洋二さんと笑ってるお前を見て……結構イライラした…」

恥ずかしくて苦笑いが込み上げた。

「それから、俺より仕事がきちんとできるお前にちょっとだけイラ

イラした…」

自分の劣等感を守りたい人に曝け出すことが、こんなにも照れくさいことだったなんて…。これも新しい発見だな。

「本当はすごく辛かったよ…」

蒼は再度海へと視線を遣り、そうつぶやいた。

「オーナーと肩が触れた時、震えそうになって息を詰めたし、お客様に声をかけられた時は少し吐き気がした…」

蒼は記憶を辿りながらゆっくりと、

「平気な振りは苦しかった…でも…」

俺に視線を向けて、

「北村が失敗しながら一生懸命フロアで頑張ってたから。だから、私も頑張れた」

そう告げた蒼の顔は、とても穏やかで。

「…お前…、よく俺を見る余裕があったな…」

自分が1日どんな酷い働きっぷりだったかを否応なしに思い出し、顔が急激に熱を帯びた。

「…厨房では、オーナーのやることを見てるだけって事ばかりだったから」

蒼は、少し伏せ目がちで小さく笑った。

「いや…、俺にはすげーテキパキ作業してるように見えたぞ」

「そう見えたのは、オーナーのこと運びが上手だからだ。私はただ指示に従って動いてただけ」

そう言っただけ、ひとつ短い息を落とした。

「充分過ぎるくらい気を遣われてるってわかってる…。葉月さんにもオーナーにも。だから…」

蒼は途中で話すのをやめて海を真っ直ぐ見つめた。熱を含む風が、撫でるように蒼の前髪をゆらす、その横顔は、なんだか泣きそうな顔に見えた。

「はじめさんは面白い人だったな…」

「え？ 何？」

蒼が何かつぶやいたけど、声が小さ過ぎて聞き逃した。

「なんでもない」

蒼はクスクスと小さく肩を揺らして、

「よし、もう大丈夫だ」

立ち上がり堤防から降りると、

「アイスが食べたい！ 北村のおごりで！」
自転車のスタンドを払い、走りだした。

「おごらねーよ！」

断片的な蒼のつぶやきに、何となく煮え切らない気持ちが残った。

だけど、空元気をみせたあいつにこれ以上無理して突っ込んでくることができなかった。

（まあ、初日だからな…） そう思って受け流すことにした。

夕食

店を終えて、いつものようにスーパーで夕飯の買い物を済ませ、帰宅した。

いや…、今日はいつも通りとは少し違う。

充月君達を見送った後、葉月はかなりご機嫌がナナメで、僕と殆ど会話をしなかった。

原因は何となくわかるけど、とりあえずそこには触れないでおこうと小さく苦笑した。

少し頭を冷却して、自分と向き合う時間が激情型の葉月には必要だと感じたからだ。

「…それにしても…」

ダイニングテーブルの向かい側で、葉月は口を尖らせて煮付けた里芋を頬張った。

咀嚼して喉に通す数秒の沈黙の後、

「…はじめ君め…」

名前を呟き、味噌汁の椀を口元に運ぶ。その顔は相変わらず不機嫌で。

「うん、この煮物うまい」

僕はなんとか話題を別の方向へ持っていくことを試みたけど、

「ほんと！ やな奴っ！」

僕の言葉はどうやら耳に届いてないらしい。こんな時は黙って聞
いてるほうが良いかと小さく苦笑してご飯を口に運んだ。

「蒼ちゃんは絶対はじめ君に騙されてる。あの気さくさの裏の顔を
知ったらきつと蒼ちゃんはすごく傷つくよ」

冷奴の薬味を箸でつつきながら、鬱積した気持ちを吐き出して
く葉月を見て、

「そうかな…」

ダイニングテーブルの中央、大皿に盛られた炒めた野菜や肉を、
取り皿に乗せて僕は呟いた。

「…何よ…、洋二は私じゃなくてははじめ君の味方なわけ？」

葉月ははつきりとした二重瞼の瞳をキツと吊り上げて、僕を真っ
直ぐ睨み付ける。

「い、いや…！ その…敵とか味方とか…じゃなく」

何となく葉月の迫力に気圧されて言葉に詰まってしまった僕に、

「悔しいっ！ ほんつと悔しいっ！ 蒼ちゃんが私とよりも楽しそ
うにはじめ君と話してた事が悔しくてたまらないっ！…！」

地団駄を踏みそうな勢いで身体を小刻みに奮わせて叫んだ後、

「蒼ちゃんは…私に…愛想笑いしかしてくれなかった……」
脱力して俯きしょぼくれた声を落とした。

「名前だっと呼んでくれないし…、洋二の事はオーナーっと呼んで
…楽しそうに話しかけてたのに…」

再度怒気がこもる声に、八つ当たりの予感が広がり、僕は更に苦笑いが込み上げた。

「洋二のバカっ！ 蒼ちゃんと話して嬉しそうにニヤニヤしちゃって！ 私だって蒼ちゃんと楽しくお喋りしたかったのにっ！」

…予感的中。

「何よっ！ 私だけ仲間外れにして4人で楽しそうにっ！」
いや、ティータイムにはじめ君を敬遠し過ぎて話の中に入らずにいたのは…

「…それは葉月が…」
「そうよ！ 私が悪いのよっ！ まんまとはじめ君の挑発に乗ってイライラした私が悪いってわかってるわよ！ でも、でも！ 洋二だって！」

じんわりと涙目になりながら、

「私が入れなくて困ってたのに！ 私のこと呼んでくれなかったじゃないっ！ 見てくれてなかった！ 無視したしっ！ 洋二が私を無視したしっ！」

（あちゃー……）

残念ながら今気付いた。あの時僕は蒼ちゃんの事ばかりを気に掛けて、葉月をしっかり見ていなかった。

「…申し訳ない…」
箸を置いて葉月に頭を下げた。

「…何度も念を飛ばしたのにつ…洋二は全然きづいてくれないし…」

（いや…念を飛ばされても…）

僕は超能力者じゃないから気付けない。

頭を下げた状態で否応なしに笑いが込み上げてしまい、肩が震えるのを必死で堪えた。

「ちょっと！ 何笑ってるのよっ！」

葉月は声を荒げるけど、

「いや…ごめん…」

レジ横の観葉植物に隠れて眉間にしわを寄せ、懸命に僕に念を飛ばしてる葉月を想像したら、ますます笑いが止まらなくなってしまった。

「笑い過ぎっ！」

葉月は、僕の脛を「えいっ！」と蹴飛ばして、膨れっ面で睨んできた。

…スリッパの先はかなり痛いよ…。

「蒼ちゃん、厨房の中では、葉月さんって呼んでたよ」

今日交わした会話を思い出し、葉月にそう告げた。

「えっ？ そうなの？」

不機嫌な顔が一瞬で輝きを放ち、

「ね、ね？ どんな事話してたの？」

目を見開き、まるで身を乗り出さんばかりに僕に尋ねる。

「夕飯はどんなものを作ってるか聞かれて、夕飯は葉月が作ってくれてるって説明した」

ランチタイムが終わる頃、賄いのパスタを作る時にそんな会話をした。

蒼ちゃんは、葉月がどんなものを作るのか興味がある感じで僕に問いかけた。

「葉月さんはどんな料理をするんですか？ って」

パスタを茹でながらした他愛ない会話だったけど、僕の中では結構鮮明に残る出来事だったなと思う。

「飾り気なしで、飽きのこない定番の家庭料理を毎日食べさせて貰ってるって彼女に言った」

小さく込み上げる笑みを抑えるように、僕は味噌汁の椀を口へ運んだ。

「…うん、本当にうまい」

ちらりと葉月に視線を遣ると、

「そっかあ…、蒼ちゃん…。ちゃんと私の事名前で呼んでくれてたんだ…」

顔を綻ばせて小さくつぶやいた。積極的な割に意外と小心者なところがある葉月は、きつと蒼ちゃんとコミュニケーションがうまく取れてるか不安で仕方なかったんだろう。

「何事にも徐々にだよ。僕らはまだ始まったばかりなんだから、焦らずいこう」

「よし！ 夏休みが終わる頃には、葉月さんから葉月ちゃんって呼んで貰えるようにがんばろっ！」

決意を表し、葉月はご飯を食べ進めた。

（やれやれ単純な…もうすっかりご機嫌だな）

再度込み上げる笑いで俯く僕に、

「なんかムカつく。洋二ひとりで凄く楽しそう」

再度脛に痛みが走った。

「ひとりじゃないよ」

笑いすぎて、目頭を拭いながら僕は葉月に告げた。

「ひとりじゃないから、こうして笑ってられる」

そんな僕の言葉に、口を尖らせつつも嬉しそうに笑みをこぼす葉月に、こうして向かい合わせで夕飯を食べる時間に改めて感謝した。

「今は二人だけど…いつかは…」

そんな言葉を投げかけると同時に、葉月の携帯が鳴った。

「あ、充月からメールだ」

……やれやれ。

ソーダ味のアイス

家路へと向かう蒼は、疲労感とはまた違う別の重さに足をとられているように感じた。

いつもの曲がり角にあるコンビニでソーダ味のアイスを買って今日の出来事を話しているうちは、本当に楽しそうだったけど。

「アイス…無くなった…」

食べ終わると蒼は寂しそうにぼつりと呟き、棒を捨てる為ゴミ箱へと歩く。

（あいつは、いつまでソーダ味のアイスに固執するんだろうな…）

蒼の背中を見つめながら、ほんの少しだけやるせなさが込み上げた。

「私には夏がこないんだよ…きっと永久に…」

数日前、まだ梅雨が明けない曇天をあの歩道橋の上から見上げて、蒼がつぶやいた言葉を嫌でも思い出した。

『来るまで待つてる』

音信不通になった蒼にそうメールを飛ばし、歩道橋へ向かうと、そこには、出会った頃と同じように蒼がいて。

『夏が来るのが怖い…』

『夏が来たらあの人の事思い出しちゃうよ…。そしたら…私…怖く

て……』

俺のシャツの両袖を握りしめ、立ってるのがやっとな位に蒼は弱って泣いてた。

『毎日、夢を見るの！ 責められるの！ お前が全部悪いんだって！ お前がいるから 』

そんな悲痛な泣き声や姿を見て、俺はアイツが蒼に着けた『枷』がどれだけ重いものなのかを痛感した。

もうすでにこの世にはいないアイツに対して、なんて身勝手に卑劣な奴なんだと、何度も憤りを感じた。 罵倒する事も、胸ぐらを掴んで殴り飛ばすことも何一つできない実体のないアイツの影に、この先ずっと蒼は泣いて怯えて生きていかなきゃいけないなんて絶対に間違ってる。

蒼は加害者ではなく、完全な被害者なんだから。

蒼はアイツと付き合ってたなんかいなかった。

サイトに書き込まれてた事なんてアイツが作りあげた歪んだデータラメで。

隠し撮りした写真を合成し、あたかも二人が親密だったよう嘘を並べて。

結果、蒼から全てを奪った。

笑いあった友達との平凡な日常も、家族との平穏な日常も全て。

ソーダ味のアイスは、蒼の気持ちだ。

夏に怯えて進めない気持ちと戦う為の大切な夏の匂い。
怯える気持ちが膨らみ、不安になると、蒼はソーダ味のアイスを欲しがる。

まるで、夏の空や彩りを欲しがるように。
そんな蒼を見て、俺はがんばれて言うことしかできない事に心底苛立ちを覚えたんだ。

なんとかしたい。

どんなにささやかでもいいから一緒に笑える夏の一步を。
だから、意を決して蒼にこう告げたんだ。

『一緒にアイビーに行こう』

って。

「……今日はぐっすり眠れるといいな……」

蒼に聞こえないように小さくつぶやきを地面に落とした。

「……ありがとう」

蒼が不意に俺に礼を言った。（聞こえてたのか？）

「私は大丈夫だから。……だから……」

ゆつくりと俺に近づき、

「だから、そんな不安そうな顔…するな…」

泣き出しそうな顔を堪えて、蒼は俺にぎこちない笑顔を向けた。

そんな蒼を見て、

「ばーか、そんなんじゃねーよ……」

乱雑に頭を撫でて、ひとつ鼻を鳴らして無理矢理だけど笑ってやった。

「…北村あ…」

「ん？」

蒼は手櫛で髪を直しながら、

「あのオムライス…作れるようになったら…、家で一緒に食べないか…？」

照れくさそうにそう呟いた。

「え…？」

蒼が自宅に俺を招き入れる発言をしたのは、これが初めてのことで、かなり驚いた。

「…ダメ…？」

頬を紅潮させ、不安の混じる上目遣いで俺を見つめる蒼を見て、つられるように顔が熱をあげた。

「だ…だめなわけないだろ！」

だって！ 彼女の家に入って！ 部屋とか見たりなんか色々っ！

そんな考えを一気に頭に掛けのぼらせ、思わず声を張り上げてしまった俺を見て、

「…北村…今、変なこと考えただろ……」

蒼は口角を歪ませて、生暖かい笑みを俺に向けた。

「か…んが…えるか…ばーか……」
やべえ！

しどろもどろな返事になっちまった！

気恥ずかしさでそっぽを向いてやり過ごした俺を見て、蒼はクスクスと笑って、

「北村は本当に正直者だな…」

そうつぶやき、自転車のスタンドを足で払いのけた。

信じて、わけて欲しいな…

キッチンから聞こえる葉月の歌声と、食器を洗う音を聞くのが好きだ。

本当なら食事の後片付けくらいは二人で、若しくは僕が思ってたよりもするけれど葉月は、

『ここは私の場所なんだから立ち入り禁止』

と、そこに立つことを許可しない。だから僕はダイニングテーブルに座り、キッチンから聞こえる賑やかな歌声を耳にしながら、コーヒーを飲み食後を過ごしてる。

母がそこにいた頃をふと思い出したりしながら。

母もいつも鼻歌混じりでキッチンに立ってた。

…そういえば、父も家では全く料理はしなかったな…。

「ねえ、洋二」

食器を布巾で拭きながら、葉月は振り返って僕を呼び、

「定休日に充月と蒼ちゃんを家に呼ばない？　一緒に夕飯どうかなあ？」

そんな提案を投げ掛けた。

「そうだな。充月君はまだ家に呼んだことがないし…。蒼ちゃんがもう少し僕らに慣れた頃合いを見て誘ってみようか？」

僕の言葉に葉月は、

「蒼ちゃんと一緒に夕飯作るってのもいいかも」
むふふつと楽しげな含み笑いをして洗い終えた皿を持ち、食器棚へ歩く。

「少しずつ楽しいが増えるといいな」

そう言って、再度鼻歌混じりで食器を拭き始めた。

その時、テーブルの上の僕の携帯が振動して、誰かからメールが来たことを告げた。

「…誰だろう」

滅多に飛んでくることのないメールに対してひとつつつばきながら携帯を開くと、送信者は…

（はじめ君だ…）

一瞬小さな苦笑が込み上げそうになりつつも、受信したメールを開いて内容を目で追った。

『ここにアクセスしてみて。蒼ちゃんの男性恐怖症の原因は間違はなくこれ』

その文章と共にホームページらしきURLが添付されていた。

（はじめ君、調べたのか…）

添付されたURLを見つめて、アクセスをすることをためらって画面を見つめること数秒。

何となく携帯の隙間から葉月を伺うと、案の定…僕を無表情でじつと見つめてた。

思わず作り笑いを浮かべてしまった僕に、葉月は更に無言でプレッ

シャーをかけてくる。

決して悪いことはしてないけど、まるで条件反射のように罪悪感に似た感情が沸いてくるようで、作り笑いが否応なしに苦笑いへと変わる。

「……」

葉月は無言のまま僕のいるダイニングテーブルまで歩いて来ると、膨れっ面を浮かべて「貸して」と言いたげな顔で僕に右手を出した。

「…どうしたいかは葉月が決めたらしいよ…」

僕はそう告げて、携帯を渡した。

葉月は画面を見つめて眉間にしわを寄せ、忙しく親指を動かした後、

「削除したから」

一言告げて僕に携帯を差し出した。

「私は充月や蒼ちゃんの口からいずれちゃんと聞けるって信じてるから。こんなふうにコソコソと勝手に調べるなんて最低よ…」

葉月なら絶対にそう言うと思った…。

（まずいな…これはますます拗れそうだ…）

ため息を落としそうになりつつも、なんとか堪えて、

「きつと予防線のもりだったと思うよ。悪気があったわけじゃ…」
「悪気がなければ何をやっても許されるの?」

葉月の鋭い言葉が僕に投げられた。

「充月は昨日私達にちゃんと言ったでしょ？ 今は聞かないで欲しいって」

真剣な葉月の瞳がゆっくりと潤んでいくのがはつきりとわかる。

「『今は』って事は、いつかは絶対話すからって想いをこめたあの子の言葉に隠れた気持ちを、私達はちゃんと信じてあげなきゃ…」

微かに震える声や、込み上げる気持ちを一旦飲み込むように、ひとつ息をつき、

「あの子はね…充月は人に頼みごととか、頼るとか甘えるって事が昔から凄く苦手だったのよ…」

葉月は小さな苦笑を浮かべて語り出した。

「…小さい頃から人見知りが激しくて。差し出した手を膨れっ面で振り払うような意地っ張りで…。いつもなんでも自分で決めて行動してた子なの。誰にも何も相談なんてしないで全て自分で…」

愁いた瞳が再度潤みを帯びていく。

「そんな充月がお願いしますって…頭を下げるなんて。きっとただ事じゃないんだなって、いくら鈍感な私でもわかるわよ…」

微かに震える声や昂ぶる気持ちを飲み込むように、葉月は息を詰める仕草を見せた。

僕は椅子から立ちあがり、そんな葉月を胸に包み込んだ。

「大丈夫だから…」

そう告げて少しだけ両腕に力を込めた。

「…僕を信じて欲しいな…」

僕が発することができたのは、情けなくもこんな陳腐な言葉だった。

僕は大きな力にはなれないかもしれない。だけど分け合える感情は悲しい事であれ嬉しい事であれ、少しでも僕にくれたらいいなという思いを込めた。

「…いいのかな…？」

葉月は小さな声でつぶやいた。

「私は…洋二に貰ってばかりで…いいのかな…？」

そんな葉月の言葉を聞いて僕は、

「貰ってばかりなのは、僕のほうだよ…」

思わず脱力して笑みがこぼれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3595v/>

summer visit

2012年1月5日22時45分発行